慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゲデス 第2報告：都市学-具体性と応用社会学としての試み
Sub Title	ii) Patrck Geddes, civics: as concrete and applied sociology
Author	高岡, 文章(Takaoka, Fumiaki) 青島, 耕平(Aoshima, Kohei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.91- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集都市・公共・身体の歴史社会学-都市社会学誕生100年記念- A編 ゲデス・プロジェクト 第II部 ゲデスの都市(市政)社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Patrick GEDDES, 1906, "Civics: As Concrete and Applied Sociology," *Sociological Papers 1905* (1906): 57–111.

1905年1月23日（月）スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス（ロンドン大学）で開催された社会学会で報告された.
議長：チャールズ・ブース卿（王立協会会員）

ゲデス　第2報告

都市学——具体性と応用社会学としての試み

パトリック・ゲデス

A.　イントロダクション——都市学的調査の必要性

今回の主題は前回の議論*を踏まえると，前半部の「具体的（コンクリート）な社会学としての都市学の試み」というタイトルの方が，後半部（「応用社会学としての都市学」）のタイトルよりも適切だろう．なぜならその目的は主に都市の具体的（コンクリート）な調査と研究を行うことであり，その観察と解釈は自然科学に添うものになるからである．コントが社会科学にとっての予備的な科学の必要性を実演し，スペンサーがこれを発展させた．さらに進化論が一般的に認知されてきたため，生物学が社会学にとって適用可能であることに異議を唱える人はもはやいないであろう．事実，多くの人が進化，地理的分布，環境，健康と病気などにおいて，時事問題の解釈のために生命(life)の概念を精力的に適用している．一方，社会的にも科学的にも優生学への関心が非常に高まっているため，これらの系列の思考，つまり生物社会的，生物地理的な思考を統合し，発展させていく必要性が生じてきたのである．

* 原注　『*Sociological Papers*』Vol. 1, pp. 103–118〔第1報告として収録〕

コントとスペンサーは大部分の生物学的に思考する社会学者と同様に，その基となる事実よりも生物学的な一般化と理論化を志向している．しかし，これらの事実との直接的な接触を維持し，広げることは常に必要なのである．それゆえ，生物学者が自らの一般化を自然から得た知識から直に生み出さなければならないように，社会学者は地理，歴史の両方で一般化のための慎重な観察と分析をしなければならない．そうすることで「一般法則」は，必要とされる地域的な事実の比較の後に，その抽象として生まれ変わるのである．

コント以後（少なくともスペンサー以後）の社会学の相対的な貧しさ——この貧しさに関してわれわれはしばしば非難されており，また学会や学派の形成の困難さや成長の遅さの原因にもなっている——の大部分は上に述べた理由から説明できるだろう．また，コントやスペンサーの一般化を論理的に用いているような——経済学ではかつてはスミスの一般化を，今日ではリストのものを用いているような——有能で説得力のある研究者の貢献が未だに不足しているのではないだろうか．実際，われわれは伝統的な経済学にしたように，コントのよく知られた三段階の法則を最近の社会学の著作に適用し，一方で一般科学の水準に達していながら，他方でコントの「形而上学的段階」やミルの「抽象的」段階にとどまっていないかどうかをしっかりと検討すべきであろう．

反対に，現在のこの国における社会学的関心の復活の大部分は，特にフランシス・ゴルトン(Francis Galton)氏や，チャールズ・ブース(Charles Booth)卿の斬新で活発な仕事から生じたのである．ゴルトン氏の生物測定学や優生学は，ありのままの姿への回帰であると同時に，人類への鋭い省察——それは彼の「旅行の技術(Art of Travel)」の明確な成果である——でもある．同様に，ブース氏の「ロンドン調査」には，ダーウィンによる遠洋航海，自宅の庭や農場におけるより広範な研究がそうであったように，ありのままの事実への注目がみられるのだ．

ワイズマン(Weismann)教授が，実際のネズミやヒドロ虫やミジンコから理論化を始め，それらを用いて論争相手をやりこめることができたことは，そのささやかな理論化や論争において大きな強みになっている．そして，グリーフ(M. de Greef)氏やロバーティ(M. de Roberty)氏の壮大なシステム化や，サイモン・パッテン(Simon Patten)教授の独創的で精巧な書物にあまり納得することができないのは，たとえわれわれがそれを正確に理解できていないとしても，実は具体的な事象に対する観察が不足しているためなのではないだろうか．非常に単純な自然研究者(ナチュラリスト)ですら，コントやスペンサーが生物学の一般化を巧みに用いていながら，周囲の都市やコミュニティの直接的な観察が欠けていて，それが欠点になっているのではないかと感じるにちがいない．彼らの仕事は，この部分については歴史的な解釈の水準にも，心理学の生産的な水準にも達していない．私は論争を挑もうとしているわけではないのだが，それでも私がコントやスペンサーの支持者をあえて批判するとすれば，それは彼らには具体的な観察と図解が不足しているためである．それゆえに彼らは，百科事典的な学識やわれわれの最近の報告書の洞察に対して，また他の報告書への歴史的，詩的な解釈に対して，もしくは，熟達した論理的な考え方に対しても十分な影響を与えるに至っていないのである．

教育学の，そして経済学と倫理学の教授による多くの論争と，詭弁家的な難解さを持つ議論を前にして，さらに認識論の研究者の深遠な専門化を前にしたらなおさら，観察する自然研究者(ナチュラリストオブザーバー)は，先生を前にした無断欠席者のような気恥ずかしさを感じてしまうことだろう．しかし彼は同時に，経験から得た確信を内面深くに抱いている．それは教授たちにとってよりも，彼にとっての外界は現実的で広大で有益である，という確信である．そしてこのような印象は，主だった思想家が学問的な資料だけではなく，同時に自然や生活(ライフ)からのメッセージや刺激などの直接的な経験を保持し続けていたということを知れば，強められ確証されることだろう．ロックも

コメニウスもルソーの業績もそうであった．重農主義者は農民の生活の中に経済学を発見した．そして，アダム・スミスも学問的な論理によってではなく，グラスゴーやカーコカルディにおける工場主としての経験，取引の経験から経済学を刷新していったのである．観念論者のバークレイですら，その理論の多くを現実の玉虫色のタール水溶液から得ていたのであった．偉大な道徳家達は，弁証法論者であっただけではなく，明らかに人間世界における現実の道徳的な集団でもあったのである．

このようなわけで，都市学は抽象的な研究ではなく基本的に具体的(コンクリート)で記述的な社会学である，という主張は正当化できるだろう——それもおそらく社会学のもっとも素晴らしい領域として．そのような秩序づけられた研究は，まず予備的な科学と協働し，単純なものから複雑なものへ，という進化論の一般的な教義と歩調を合わせる．そしてさらに，社会の発展における地理的状況の影響を対象とする一般的調査と結びついていくのである．要約すれば，都市学の研究者はまず，都市の観察者でなければならないということである．そして，ちっぽけな村落のなかに見え隠れする小さく単純な萌芽から，都市の起源と発展を考察する者でもなければならない．このように，生産的な社会学者は，第一に研究者の中でも《優れて》逍遥する観察者であるべきなのである．そしてなによりも，文字どおり観光客，旅行者であるべきなのだ——そうすれば，気取らないギルバート・ホワイト (Gilbert White) や世界の旅行家ダーウィンのように，自分の家の周りでさえも最善を尽くすことができるはずなのである．

B. 具体的調査における初期的な方法

われわれの都市(シビック)研究は，ここまで論じてきたような理由で，人々がそれぞれ特色ある類型——狩人，羊飼い，農民，漁民——の生活を営み，その地域内で進化したり退歩したりしているような，谷間地域の調査から始まった（第 1 報告 A 節）．職業類型を加えたそれらの典型的な谷間地域の

具体的な図解は明快であるほどよいだろう.

それでは，進歩と退歩の原因は何であろうか．これらは何よりも，そのような特定の社会形態に本来備わっている欠陥や特性によるものなのであろうか——同時にわれわれは，これらの様々な形態が地域ごとに互いにどのように作用し合うのか，またどのように結びつき，伝播し，征服され，破壊され，置き換えられていくのかを考えなければいけない．それゆえにわれわれは分化の過程，それぞれの職業と社会類型における進歩や退歩，これらの類型の上昇，下降の振幅などの歴史を，より一般的な言葉で再解釈しようとする．要するに，スチュアート・グレニー(Stuart-Glennie)氏やそれ以外の社会学者が巧みに主張してきたような人種的な対立でさえも，その多くがこれらの職業上の闘争が基礎となって説明されるということである．私がつねづね社会学の主要な開祖の一人であるル・プレーの功績に注目してきたのは，すべての人種と類型，コミュニティと制度，慣習と法，それどころか言葉と文学，宗教と芸術においても，さらには観念と個別性などのあらゆる研究においても，地域と職業という要因が基本的に重要だからなのである．そしてそれは，(a)彼の近代の産業社会における生活のモノグラフィックな調査——労働者の置かれた状況や家計などの現在の経済学的研究は，その「社会のモノグラフ(Monographies Sociales)」の系統をひくものである——のためだけではなく，(b)変化し続ける環境の中での生存競争において人間が示す最も単純な反応が，産業や家族類型，さらに社会組織の素朴な起源である，とする彼の新しい主張による人類学の精力的な再構成のためでもあるのだ（大部分の人類学者に十分に認識されているとはとても言えないが).

多くの経済学者のように，狩猟，田園生活，農業の形態を，現代に至る産業主義的，商業主義的，帝国主義的，財政的という文明化の過程の《前段階》として認識するだけでは十分ではない．このような見解は今でも多くみられるが，役に立つよりも障害になっている．われわれに必要なの

は，現在の文明をこれらすべての類型の複雑な闘争や結合として，そしてそれらの今日に至るまでの発展の結果として見ることなのである．今のところは，これまでのような単純な職業類型を人類学者に残したとしても，市内の博物館で彼等にわずかばかりの便宜を与えるだけだろう．われわれは，かつて熱心な坑夫や保守的な羊飼いがどのようであったか，もしくは，国家的，帝国的，国際的な政治の最初の局面を具体的に思いつき，そこで新しい争いを始めた冒険的な漁師や狩人がどのようであったかに目を向け始めたところなのである．しかし，われわれはただ目を向け始めただけではない．戦士（ソルジャー）は，現在の若者のスポーツが，そしてかつての空前の軍国主義が，等しく狩猟世界に深く結びついているということをありのままに教えてくれるだろう．このように，平和への希望は，多くの人が考えているように国際法や文化交流の発展——たしかにそれはすばらしいことなのだが——にだけあるのではなく，より全体的で完全な事実（ネイチャー）への注目にも見出すことができる．すなわち，近代や現代の支配者層は狩猟民の世界だけに執着してきたが，自然観察者（ナチュラリスト）の静かで広がりのある経験や，他の職業のより厳しい経験にも注意を払うべきなのである．しかし，われわれはこれらの主要な社会形態の基本的な認識だけでは満足しない．それらの地域的な違いを記録し，比較するべきなのだ——したがって包括的な地域調査は，これらの大きな類型内部での地域的な多様性を等しく認める．今後はただの抽象的な「狩猟民（ハンター）」について話すことはなく，それぞれの風土における特定の狩の類型について語ることになる．われわれの時代の穏健なスポーツマンがカブの畑と動物の森を区別するくらい明確に，これらの類型自体をその類型内部で，そして類型間において区別していかなければならない．そのような必要不可欠な細かい調査の後に，それらを比較し一般化しなければならないのである．

牧場や森林についても同様である．この国の観光客は，スイスの町や市街とわれわれのそれとのコントラストに心うたれる．一方で，スイスの牧

場では牛の群れに目を奪われるが，スコットランドやヨークシャーの羊の群れには目もくれない．そして，観光客だけではなく歴史家や経済学者も同様に，現在ではR. L. スティーブンソン(R. L. Stevenson)の生れ故郷スワントン(Swanton)として知られているガーラシールズ(Galashiels)やブラッドフォード(Bradford)が，羊毛の村からどのように発展していったのかということをほとんどみようともしないのである．また，スイスの豊かさだけではなくスイスの特性や制度も，主に高地の牧場と豊かな牛舎にその起源を遡ることができる．スイスの牧場が豊かなのは石灰岩によるものであり，貧しいスコットランドの羊の放牧が，比較的硬くて水を通さない片磨石によるものであるということは，地理学者の細目というだけではない．どちらの例においても地域や人口の，文字どおり具体的な進化の過程における基礎的事実といえるのである．そしてこのことは物質的，経済的発展だけではなく，美的な感覚や知性，道徳などのより細かいことについても当てはまる*．地理学的，決定論的な社会学の見地で努力し続けなければならないのはこのような理由のためなのである．そしてこのことは，ただ科学的な理由のためだけでなく実践的な理由にもよる．スイスやアイルランドやスコットランドの谷では，住民の状況をどうすればよりよくできるかにどこよりも関心が払われてきた．しかしまず，彼らが自然の実際の影響を熟知しておらず，同時にそれが基本的なものである(最上のものとは言わない）ことを十分評価しようとしないということこそが，そのような運動が失敗し続けてしまう大きな理由なのである．問われるべきは，石灰石から生じたものは何か，片磨石から生じたものは何か，という問いである．この意味で，1900年に開催されたパリ万博における〈スイスビレッジ〉のコーナーは，具体的な社会学的ダイアグラムとそ

* 原注　スイスに関するこの理論をさらに正当化するものとして，『月刊インターナショナル(*International Monthly*)』(1900年8月）所収の筆者の「万国博覧会」を見よ．

のモデルが持つ素晴らしい教育的価値を提示したといえよう．そこでは地理学的，経済学的な知識と洞察は，いまだかつてないほどの共感と芸術的(artistic)能力によって表現されていた．同じような実地教育が他の国に関しても適切になされた場合にのみ，われわれは未開の状態がどのように「田舎(rustics)」になり，さらにどのように都市(civics)になるかについて適切に学ぶことができる．都市(civics)も農村も本来は具体的なものなのだが，両者は政治的な場を構成し，そこにおいて抽象的な水準で扱われてしまうのである——普通あまりにも間接的で抽象的なのだが．

最終的な説明のために海から話を始めよう．ここでまた漁師を例にとれば，それぞれの地域的類型は，彼が町にどのように寄与しているかという観点から追跡されなければならない．例えば，ノルウェーの鮭漁師，ダンディーの鯨漁師，ヤーマス(Yarmouth)のにしん漁師，ニューファンドランド(Newfoundland)の鱈漁師，エーゲ海のサンゴ礁の漁師，それぞれが全く別の類型である．あるものは特徴的で標準的な家族関係を発展させているか，少なくとも発展させる傾向にある．そして，それは社会的な結果である制度に対応している．さらにそこでは，紐の強度を決定する麻の性質とねじれ具合に，また，強力な銃の性能を生み出す合金の化学的，微視的な構造にさえも，特有の性質と欠陥が現れているにちがいないのである．

われわれの周囲にある知的なサークルや地質学的，地理学的，その他諸々の博物館は，明らかに冬の避難所となっている．そこではそれぞれの地域調査のグループが自分達の話をし，研究を比較しあい，現場でなされた観察をもとにした一般化と，他の人々による一般化を比較するために集まっている．これらは徐々に，知的サークルの若い人々のものとなっていくに違いない．われわれはテムズ・ヴァレー(Thames Valley)，ロンドン流域，ロンドン調査について最もよく知っているはずだし，知っているべきでもある．しかし，われわれの学問の進歩は，近隣地域に対する世界

的な調査が示しているように，世界各地のあらゆる時代の農村的，都市的（シビック）な地域，そして職業とそこから生じる特質に対する調査がますます多様で徹底的になってきていることを示唆してもいるのである．

次に，地域ごとに農村と都市の社会学的調査をすることが必要である．まず，その地域調査の現場において，たとえ博物館のコレクションのためであろうとなかろうと，自然科学のようにノートとカメラが必要になる．われわれの学校で長らく信用されていなかったつまらないマニュアル本は，今や新しく魅力的で直接的な自然研究の本に場を譲りつつある．同様に，現在いくつかの学校で使用されている*あまりにも抽象的な都市学のマニュアル本は，具体的で地域的なものに置きかえられなければならない．それに対応して，そこでなされていた政治的，個人的な成熟に関する抽象的な忠告も，各地域ごとの理想主義 (regional idealism)——それは必要とされ状況が許す限り，他地域によって補われるものである——に場を譲りつつあるのである．

C. 地理学的決定主義とその困難

それでは，都市とその市民双方におけるもつれた考えを解きほぐすために，より十分に地理学的観点——われわれはそれが，縦の傾斜において町と市がどのように発展するのかを説明するのに有用であることを既に知っている——を，谷間地域を横断して，そしてそれぞれの職業別に用いてみよう．実のところ，これはまさにモンテスキューの方法でもある．彼の古典的な『法の精神』は，リッター (Ritter)，バックル (Buckle)，テーヌ (Taine)，ル・プレーなどの方法を先取りしていた．したがってもう一度，彼らが共有していた——というより結果としてそうなった——考え方を，

* 原注　このことについてのより十分な検討のために，『同時代評論 (*Contemporary Review*)』(1904年8月) 所収の筆者の「都市の発展 (City Development)」と比較せよ．

以前よりも適した最近の用語ではっきりと言い表すべきなのである．かりに地域的特徴が基本的な職業の性質を決定するとしたら，それは次に本質的に家族類型を決定する．また，仕事の性質と方法は一般的にその組織の様式を決定する．例えば，専門化した指導的な階級の特徴とその興隆や，一般の人々と比較した時に浮かび上がるこれら職業上の首長の性質などを決定するのである．同様にその家族形態は，例えば司法（ジャスティス）や行政（ガイダンス）の発展を促すのであり，その制度的類型はもちろん社会的環境への対応としても生じているのである．

たしかにこの点において，われわれは社会学の研究者に対して地理学的，進化論的な決定論の主要な議論を押し付けているのかもしれない．というよりも実際にそのような観点を適用し，その方法を用いるようにと促しているのである．それは彼らの習慣にとって異質なだけではなく，生命（ライフ）と歴史に対する全体的な見方としても反感を抱かせるものかもしれない．そして，この社会に対する決定論的な見解の巧みな擁護が，少なくとも過去5世代にもわたって人々を納得させることができていないのに，なぜあらゆるものを調和させると称するような方法を装ってまで，このような議論の余地のある提案をしなければいけないのだろうか．しかし，これは熟慮の上のことなのである．地理学的要因に対する人間の力の重要さ(civil importance)を誰も否定しないのだから，現在のような哲学的，理想主義的批評――他の要因に対するその見解は，何よりも人間生活において，もちろん都市づくりにおいても至上のものとされている――が確立されている状況においてもこのような見方を実験し，そこから何らかのことを学んでもいいはずである．そうして得られたものは忘れられることはないだろうし，思考から排除されることもないだろう．まさにここで主張していることは，もし進化論的概念に結び付いた自然観察者的な方法(naturalistic method)を用いることがいくらかでも許されるのならば，単純なものからより複雑なものへと進まなければならないし，今ここからそれを

始めなければならないということなのである．

草の成長は適当な傾斜，草原の状態，降水量に左右され，牛や羊の群れを条件づけるものでもあり，羊飼いの存在をも決定している．これらのことは田園の芸術や工芸を生み出すだけではなく，族長の類型や家族の発展にも影響を与えている．またこのことは，彼らの親切心やそれ以外の美徳，その遊牧民的傾向，少なくとも農民のものとはかけ離れた彼らの固定化されない土地所有形態，さらに穏やかで巧みな交渉術においても確認されることである（交渉人の利害関心によって，牧草地が成長するかどうかは決定される）．訓練の結果である熟達は，若い頃には遊牧生活を送り冒険に明け暮れたキャラバン隊のリーダーが歳を重ねて族長になるように，族長やリーダーの異なった類型として自然に発展していく．したがって，アブラハムかヨブ，ラクダ操者のマホメットか天幕作りのパウロなど〔4人とも聖書の登場人物．アブラハムは不安定な遊牧生活を送り，ヨブは多数の家畜を所有する富裕な牧畜生活を送った．また，マホメットはシリア近辺での隊商貿易を経験し，パウロはコリント伝道において以前に習得していた天幕作りを行った．ここではそれぞれの経験と類型との相関関係を想定しているものと考えられる〕を議論できるような段階になって初めて，決定論者とその反対者，民衆史観論者と英雄史観論者の間で真の論争が生じるのである――事実次第にそうなりつつある*．この段階において展開される論争は実に興味深いものとなるだろう．つまるところ，自由意志の主張というものは，諸々の環境によって与えられた要素間からの選択を行うということ以外にないのではなかろうか？　地理学と都市学がわれわれを決定論に導いたわけだが，その決定論を最大限に引き伸ばしたとし

* 原注　農業革命の本質的起源と，その近代に特有の発展に対するこの方法による研究として，『エヴァーグリーン(*The Evergreen*)』(1896年，エディンバラ・ウェストミンスター）所収の著者の「牧草地の産物(Flower of the Grass)」を参照せよ．また，雑誌『社会科学(La Science Sociale)』の諸所，特に初期の論考，もしくは1905年1月のものも参照せよ．

ても，この問題の否定的側面を証明することはできない．しかし，新しい理想の心理的起源が天才の心中にあるものなのか，それともなんらかの外部の要因によって与えられるものなのかという問題の解決は，都市学に携わる地理学者や歴史家の視野を明らかにこえている．もしわれわれが双方の観点に対して，事実を一覧表にする方法を正しく使うとしたら，どちらにとっても有益なことであろう．そして双方の事例において，比較対照から得られた明晰さを公平に提供できるとしたら，さらに素晴らしいことだろう．もし，地理学的決定論の主張とその倫理的，心理的な反対論をそれぞれ明確に定義し比較することができるなら，たとえその完全な統合がわれわれを越えたものとして残されるとしても，それぞれの仕事はもっと利用しやすいものになるはずなのである．

D. 表記と解釈のための抽象的方法の必要性

一般的な地理的研究だけではなく，前述したような社会的な解釈も長い間進められている．歴史家と批評家によってなされてきた研究——その中で最も著名なものでも，モンテスキューやその直後の後継者，さらに最近ではバックルやテーヌ——を，さらにフンボルト (Humboldt)，リッター，ルクリュ (Reclus) のような地理学者，考古学者のブーシェ・ド・ペルト (Boucher de Perthes) や地域経済学者のル・プレーの仕事を見ていただきたい．このように，具体的(コンクリート)で進化論的な社会学（もしくは，少なくとも《社会記述 (sociography)》）の成果の主だったものは既に存在している．しかしわれわれの時代，このような社会において，そしてまさにこの報告においてわれわれがなすべき仕事は，どこでもそれとなくぼんやりと表現されているだけで，ほとんど体系化されていないその本質的な科学的方法を，これらの一般的な研究から抽出することなのである．

実際われわれは，現在のよく吟味された社会調査の文献，あるいは共同で進められている新しい調査においてのみ，明確で整理された記述の方法

を見出すことができる．そのために科学的方法についての議論が重要なのであり，それは先に刊行された論文集の多くを占めていたのである．しかしここに，社会学者が常に陥っているような，社会科学の一般的な方法の，非常に抽象的な（その結果あまりにも静的な）表現から逃れる方法があるはずである．事実われわれの研究はその抽象的な表現のために，社会学的と考えられる領域も含めた専門的な科学者集団に対してそれほど魅力がなく，また実践的な精神を志向するわれわれのコミュニティにおいても嫌悪感を抱かせることになっているのである．

数学や天文学，植物学，動物学，地質学等の科学の歴史をふりかえれば，独自の洞察をもつ有能な思索者がいるだけでは十分ではないということがわかる．その主義主張は，科学の総体に受け入れられ組み込まれる前に，中立的な立場で，明確な主張，方法，命題，「法則」，そして理論というかたちではっきりと具体化されなければならない．しかし，天文学者，地質学者，自然研究者（ナチュラリスト）は，観察の結果と一般的な概念の両方を堅苦しい言葉で記述しており，なじみのない学術的なタームや概念をマスターすることを一般の読者に要求することになっている．一方で彼らは明確で整理された，技術的，記述的，比較的，分析的，総合的な方法を用いて研究を続けている．これらはできるかぎりただの口述ではなく，公式化し，図表や図解的な表現として具体化しなければならない．そうすることで叙述が一層明確になるだけではなく，より活動的な調査の実践者になっていくのである――そして事実上，文字通り《考える機械》となるのだ．しかし，数学者は独自の表記と微積分法を，地理学者と地質学者は地図や立体的描写と区分けを，植物研究家と博物学者（ナチュラリスト）は整理された分類法を有していながら，その推進者がしばしば明確な科学的表記を採用しないできたことは残念なことであり，政治経済の遅れをもたらし，コントが非難した「悪名高い不一致と思想的貧困」の大きな原因にもなっていたのである．特にこの国では，公認の統計家ですら首尾一貫した図解的（グラフィック）な方法を使用することに

長い間反対してきたのである．

したがってここでの議論のために，一般的で抽象的な社会科学の方法論よりも，人間社会の比較や研究に，さらに特に都市に対して簡単に適用できる具体的な記述方法を精巧に仕上げていくことの方が差し迫った課題であると提案したい．このような主題を公平に扱うために，人類学の著作だけでなく，多くの社会学の文献，重農学派 (Physiocratic School) の「経済表 (Tableau Economique)」から，スペンサーの「社会学表 (Sociological Tables)」まで，さらには最近の研究者も含めて詳細に検討する必要がある．私はこれらの中でも——特にブース氏の仕事と，彼の若い調査者への影響を認識することに加えて——，ル・プレー*によって導かれた社会地理学者たちの，有用で示唆に富む仕事に注目したい．特に後期の表現形式におけるその分類法は†，抽象的にではなく具体的に社会問題に取り組もうとする人に興味を抱かせるだろうし，価値があるに違いない．

しかし，これらの分類と方法のそれぞれに関して——あらゆる段階で彼らに個人的な恩義や借りがあることを認めるのだが——その中には，現在の目的にとって十分に満足のいくものはないかもしれない．ゆえに，できる限りこれらを利用しつつも，われわれの目的のために新たにその問題を調べていく必要があるのである．

E. 都市の複雑さとその一般的な分析

都市の日常的世界において，市民 (citizens) が用いている実際の分類についての考え方とは一体どのようなものであろうか．ジュールダン氏の散文の話のように〔モリエール『町人貴族』での一場面．第1報告E節を

* 原注 「社会用語 (La Nomenclature Sociale)」(雑誌『社会科学 (La Science Sociale)』からの抜粋，1886年12月）パリ，フィルマン-ディアクト (Firmin-Diact)，1887年．

† 原注 ドゥムラン (Demoulins) 著，「F. ルプレー後の社会学 1882-1905年；社会的分類について」，『社会科学 (La Science Sociale)』，1905年1月．

参照〕，市民自身が社会学的方法を用いていることに気づいていなくても，われわれの観察をより簡単で信用できるものにする場合を除いてはたいした問題にはならない．

彼らは〈人々(People)〉や〈行為(Affairs)〉についてはよく話したり考えたりするが，空間(places)についてはあまり注意を払わない．ただ興味深いだけでなく，〈人々〉というカテゴリーにおいては個人，すなわち自己と他者が集団よりも優先されている．しかしながら，人々の共通の利害を代表するものとして〈制度(Institutions)〉や〈組織(Government)〉が必要になってくる．そしてそうしたもののなかでは，行政機構(the state)が教会よりも重要な位置を占めている．もはや多くの人にとっては出版物が教会の代用品として機能するようになっているのである．〈行為〉の世界においては，商業が工業に優先している一方で，スポーツは両者に強固に結びついている．観察者が遠くからスポーツの最も明確な形態として眺めている闘争も重要であろう．ここから，平和は積極的な理想としてではなく，せいぜい戦争がない状態，より一般的には潜在的な戦争状態という，本質的に消極的な状態と考えられるのである．空間の中で中心的なものは，銀行と市場（物質的な形態をとる以前の財政的な形態としてのもの）であり，次に鉱山や工場などである．そして，これらの周りにはそれらを守るために，固定的であったり流動的であったりする要塞のようなものが形づくられることになる．家についていえば，個人を守ることだけが真剣に考えられていて，そこにはせいぜい友人や《仲間》，同僚が含まれるだけである．そこでは，個人や家族の状態とその快適さに，道路や近隣がどのような影響を与えるかということと区別して，少なくとも自分たちが関心を持つような問題としてそれらについて考えることはほとんどない．

このような見方は，厳密な分類を精査するためには明らかに十分ではない．しかしながら，大枠のアウトラインとして要約は作れるだろうし，下

記のように一覧表化することも可能だろう．

〔図表 2-1〕 日常的な町とその活動

人々 PEOPLE	行為 AFFAIRS	空間 PLACES
(a) 個人 （自己と他者）	(a) 商業，工業，など スポーツ	(a) 市場，銀行，など 工場，鉱山，など
(b) 組織 世俗的なものと精神的なもの（行政と教会）	(b) 戦争と平和 （潜在的戦争）	(b) 城砦，戦場，など

次に，どのように日常的な世界の行為から，対応した思考世界(thought-world)が生じるかを記しておこう．もちろんここには複雑な地域的特色から生じた多様な要素が含まれる．しかし，その表題は前述の枠組みと対応させて下記のように表すことができる．このような選択は，ゆっくりと流れる伝統——記憶の貯蔵庫への文字どおりの反映である——と合致する主観的な要素が，客観的要素にどのように対応しているかを示すためには十分なものだろう．このように拡張された図表(diagram)においてその客観的要素をより一般的な言葉で表現すると下記のようになり，新しく解釈されることになるであろう（鏡の像のように完全に裏返しであることも明記しておこう）．

次に，ここには思考や教育との関係と同じように，町の生活と「学問(schools)」の間に全般的な関係があり，その関係を十分に検討しなければならない．

もちろんこのような図式的な提示は何よりも明確な表現と比較のためのものなのだが，——地質学者が言うような「観察(inspection)」によって，これまでは気づかれなかった関係をも示唆している．かつての観念(ideas)や思考が，生活の「反映」としてどのように生じたかということがはっきりとわかるだろう．さらにはそれらの性質や欠陥——見る人の立

〔図表 2-2〕

	人々 PEOPLE	行為 AFFAIRS	空間 PLACES
〈町〉 "TOWN"	(a) 個人 (b) 制度	(a) 仕事 (b) 戦争	(a) 労働－空間 (b) 戦争－空間
〈学問〉 "SCHOOLS"	(b) 歴史 (組織的) (a) 生物学	(b) 統計学と歴史 (軍事的) (a) 経済学	(b) 地理学 (a) 地形学

場に応じたその部分的な真実やその不十分さ――をも説明するかもしれない．最初の〈人々〉の列では，(a) の個人的な生活が生物学の鮮明な関心とともに，歴史における「英雄史観」にどのように対応しているかが簡潔に表現されている．逆に，(b) に限って言えば，制度的な発展が主要な要素であるということになる．中央の〈行為〉の列に移ろう．(b) に関して，例えば戦争の必要性に関連する統計学の出現と，その非常に経験主義的な特徴が結びついているということを示唆しているといえるかもしれない．もしくは，不十分な帰納的な証明という，経済学理論のあまりにも一般的な弱点についても同じようにいえるだろう．最後の〈空間〉の列では，教育の主題としての地理学が長い間持っていた弱点と，一方で地理学が戦争の場では周期的に刷新されている，ということが示されている．実際にわれわれは，すべての学問研究と，現実の世界における活動とその観念，思考と実践，もちろん公式になされている教育との間でもそのような比較を続けているのである．こうして，それらの複雑さやもつれあいやしばしば生じる対立と矛盾が，多様な〈町 (Town)〉の生活から生じている複雑で相反する要素とどのような関係にあるのかを，より一層明確にしていくべきなのである．しかしながら，〈町 (Town)〉と〈学問研究 (School)〉を，もっと徹底的に起源と最も単純な関係という点から理解しようとする議論は，眼前の問題に対しては既に時代遅れのものとなっているかもしれない．

（石井清輝訳）

F. より厳密な分析 (1) 〈町 (THE TOWN)〉

われわれは〈町 (Town)〉と〈学問研究 (School)〉の発展を十分に理解するために，かつて流布した常識的な見解——このような見解は往々にして，明らかに科学的な知見と反する——に対抗しなければならない．そして，既に再三指摘してきたように，このような見解を地理学的観点から緻密に構成し直し，〈人々(People)〉や〈行為 (Affair)〉といった要素を上記の概念枠組みの中に位置づけ直さなければならない．

では再度，単純な生物学的公式から始めよう．

〈環境〉……〈状況〉……〈有機体〉

これは社会的地理学者によって，次のように読み替えられ定義される．

〈地域〉……〈職業〉……〈家族形態と発展〉

これは既に言及したモンテスキューや彼の後継者たちのあの信条を正確に要約している．ルプレーの最も簡潔なフレーズ（「場所 (Lieu)，職業 (Travail)，家族 (Famille)」）を参照し，さらにこれに手を加えると次のようになる．

〈空間 (PLACE)〉……〈労働 (WORK)〉……〈集団 (FOLK)〉

われわれは〈町〉と〈学問研究〉のより十全な理解へ至る困難な道のりを，この単純で原初的な社会的公式から歩み始めることにしよう．

したがって，この図式を直ちに〈町〉と〈学問研究〉の複雑性を射程に入れる方向で検討しなければならない．まず〈空間〉に関してであるが，これは単なる地形学上の場所を指す概念ではない．〈労働 (Work)〉は根本的に自然条件によって規定されており，〈労働〉のこのような側面については《空間－労働》と呼ぶことができよう．農場や果樹園，港，鉱山，作業所が出現すると，それはわれわれが一般的に定義しているような《労働－空間》となる．一方で，さらにこの上に住居，すなわち《集団－空間》が生じる．

ただし，これらの要素すべてをひとまとめにすれば，単一の〈町〉とい

う概念が成り立つというわけではない．われわれはその世界と歴史について熟慮した上で，町の生活の多様な複雑性へと入り込んでいかざるをえないように，これらを解きほぐしながら前へと進んでいかねばならない．それゆえに，明確な学術用語と調和のとれた規則的な図式の使用を欠いてはいるが，この簡単だけれども正確な公式には価値があるのだ．これによって，日常的に使用される平易な言葉を使いつつ，〈町〉の概念に含まれる各要素間の作用をきちんと正確に分析し，それらを相互に関連づけることができるだろう．またそうすることによって，日常用語を定義づけないまま放置したり，経済学者が代替手段として行っているようにこれらの言葉を恣意的に定義し直すような過ちを防ぐことができる．実際，これらの過ちは上記の図式における〈労働〉の概念にとって不可欠な要素を欠如させ，これらの要素に触れられなくさせてしまうし，また〈集団(Folk)〉や〈空間〉の概念にとって不可欠な要素も同様に見失わせてしまう．

〔▲〕また，用語の問題と同様に，提示される表や図についても，書き手が思っているほどには，読み手にとっては明快でもないし，満足できるようなものでもないという傾向がみられる．口頭での説明時には，明快でわかりやすいと歓迎された図式が，紙の上に記述されるとたちまちわかりにくいものになってしまうのだ．なぜこうなるかというと，口頭で説明が行われる場合には，説明がすすむとともに黒板上の図式も完成されていくため，聴衆は容易にそれらを理解することができるからである．よって紙上の図表に同じ効果を期待するならば，説明が進展する段階ごとに，その都度必要な図表を提示するべきなのである．したがって，最初の公式（〈空間〉……〈労働〉……〈集団〉）は，次のように発展する．

〈集団〉

〈空間－労働〉　　〈労働〉　　〈集団－労働〉

（自然条件）　　（職業）

〈空間〉

〔▲〕さらに，空欄のいくつかは既に示唆されているし，詳しく調べれば残りの空欄も埋められることがわかるであろう．これはさらに秩序だった図表 2–3 へと発展する．

〔図表 2–3〕

空間－集団 （土地の人 Natives）	労働－集団 （生産者）	集団
空間－労働 空間	労働 労働－空間	集団－労働 集団－空間

〔▲〕最も単純な〈町〉，すなわち現代のスコットランド人の話しぶりにある「田舎町 (farm-town)」や番地がなく地名でのみ呼ばれているような領域 (ton) といった，初期の田園の概念でさえ非常に複雑である．

続いて，〈集団 (Folk)〉の社会的階級および世襲的階級（カースト）への多系的な進展の過程をたどることができれば，〈空間〉，〈労働〉，〈家族〉に関する多様な因子の作用や相互の関連を図式化することができるだろう．しかしながらここでは，現在，地理や歴史の至る所に存在する貴族と平民という変幻自在な概念の分類や比較に入り込まずに，そのような人間集団の分化 (differentiation) が発生するということを確認しておけば十分であろう．

G.　より厳密な分析 (2)〈知の様式 (THE SCHOOL)〉

われわれは日常生活の行為――われわれの用語にある〈町〉自体――から，それに対応する主観的世界――思考の《諸潮流》あるいは《知の様式》(the Schools of thought)――がいかに生起するかを記してきた．そ

うした思考の《知の様式》は遅かれ早かれ，教育に関する考え方や制度(schools of education)にも反映されるだろう．人々の類型，労働の種類や形式，全体的な環境といったものすべては，共同体の精神によって具現されるようになり，個人，個人の行為，個人の空間自体に影響を及ぼす．したがって（より平たく言えば，ある地域の共同体の内部構造が単純であるほど，また他とは隔離されているほど，明確な価値基準がその共同体の隅々まで行き渡りかつ永続的なものとなるわけだが）そこでは明らかに，方言と標準語を区別するアクセントや語彙の微妙な差異から及んでくる，局所的な思想の変化と話し言葉の様式が生じる．同様に職業活動の特徴的な多様性，技量の形式，商業の方法が存在する．またそこには，特徴のある作法や習慣，すなわち，認識可能な類似性が存在するわけだが，それはとらえるのが困難なほど微妙であるか，あるいは，紛れもなく広く一般的なものであり，顔つきや服装，話しぶりや文芸，礼儀正しさや争い，商業や政策，街頭や住居，物置から宮殿にまで，さらには牢獄や大聖堂にまで及んでいる．従って，どの集団(folk)もそれ自身に特有の習慣(ways)を持つようになり，またどの町も自身の知の様式（スクール）を持つようになる．

〔▲〕このように複雑な社会生活環境が特徴的な形態や構成を獲得していく一方で，より若い世代が出現してくる．あらゆる習慣や意識において，遺伝形質は一般的に多様性を帯びるというよりむしろ共通性を帯びてくる．どの場所や時間においてもほとんど同様であるが，人種上，職業上，環境上の大きな形態変化が，近代都市における形態変化として発生するときには，遺伝形質の強さは特に際だっている．換言すれば，若い人間集団は，固有の遺伝形質である生物学的な祖先だけではなく，社会的な祖先からも多くのものを相続しているのである．連続性にかかわる要素としてわれわれが考えるものを挙げるならば，肉体に関する要素がまず挙げられるが，それ以外に精神的な要素ももちろん挙げられる．そして，それらの〔肉体と精神に関する〕要素は，遺伝形質(inheritance)――この言葉

は実際のところ，生物学者が伝承 (heritage) という言葉から（物質的なものであれ非物質的なものであれ）その経済的・社会的要素を取り除く目的で使っている――という言葉によって首尾よく区分されている．肉体と精神にかかわる遺伝形質と，社会的・経済的な要素にかかわる伝承の区分は必然的なものであるが，この区分は明らかに用語とともにさらに精緻化される必要がある．これから先しばらくは，物質的な富――それは経済学者にとって第一の関心事なわけだが――と密接に関連する遺産 (heritage) という言葉は使用せずに，非物質的で特徴的な社会的要素――われわれがここで特に関心を持っている要素――に対しては，伝統 (tradition) という言葉を用いることにしよう．このことは，実際には何ら新しい提案ではなく，実のところ日常的な慣例の受容以外の何ものでもないのである．一般的に言えば，共同体の生活においては，伝統とは個人にとってどんな記憶が存在するかということなのである．すなわち，若い世代は彼らの祖先から，有機的で精神的な特質を相続するだけではないし，また，蓄積された富，道具，土地を受け継ぐだけでもない．彼らは伝統の中で成長するのである．この過程における模倣の重要性，つまり共通の経験の問題は，M・タルドによって指摘されている*．以上のような考察のおかげで，われわれは社会的な伝統の獲得を，乗り気でない若者に一から十まで無理やり受け継がせる必要のある問題としてみずにすむ．またわれわれは，物事を認識したり，それらに注意を払うために，古い事柄と同様に新しい事柄からも何かを学んでいる．つまりわれわれは，最も原始的な人々からも最も進歩した人々からも何かを学んでいるし，未開人からもギリシャ人からも何かを学んでいるのだといえよう．そしてそのことが真実であるならば，人々が自己を研鑽していく過程をより豊かなものにするために，自分たち

* 原注　タルド Tarde『模倣の社会学 (L'Imitation Sociale)』および他の著作を参照．［訳注，ここでゲデスはガブリエ・タルド (Jean Gabriel Tarde. 1843–1904) の模倣の法則のことを示唆していると思われる．］

が発達していく段階で得られる成果というものは，おおよそ自分たちの肉体的な生の各局面からだけでなく，社会的な生の各段階からも生じるのだということを考慮すべきだろう．ところで，先程述べた最も未開な社会と最も文明化の進んだ社会を両極としながら，その中間領域において文明の発展と衰退が繰り返されるわけであるが，そうしたなかで，若者に対する特殊な教育の制度が出現してくる．この制度は人々の経験や共同体の伝統を伝達する場であった徒弟制度の代替品――ある意味人工的で不自然な代用品であるか，せいぜいそれらをわずかながら促進させるもの――でしかない．われわれはこのような制度に対して，限定的であるという意味合い，そして教育上のという意味合いを込めて，学校 (a school) という言葉を当てることにする．しかしながら，この議論全体の目的は，「知の様式 (School)」という用語を，技芸史家や思想史家 (the historian of art or thought)，そして社会学者が使いつづけてきたようなより広い意味でとらえ，その正当性を明らかにすることである．もちろん，特化した教育上の知の様式としてのあらゆる種類の学校 (schools) という概念もこのなかに含まれている．

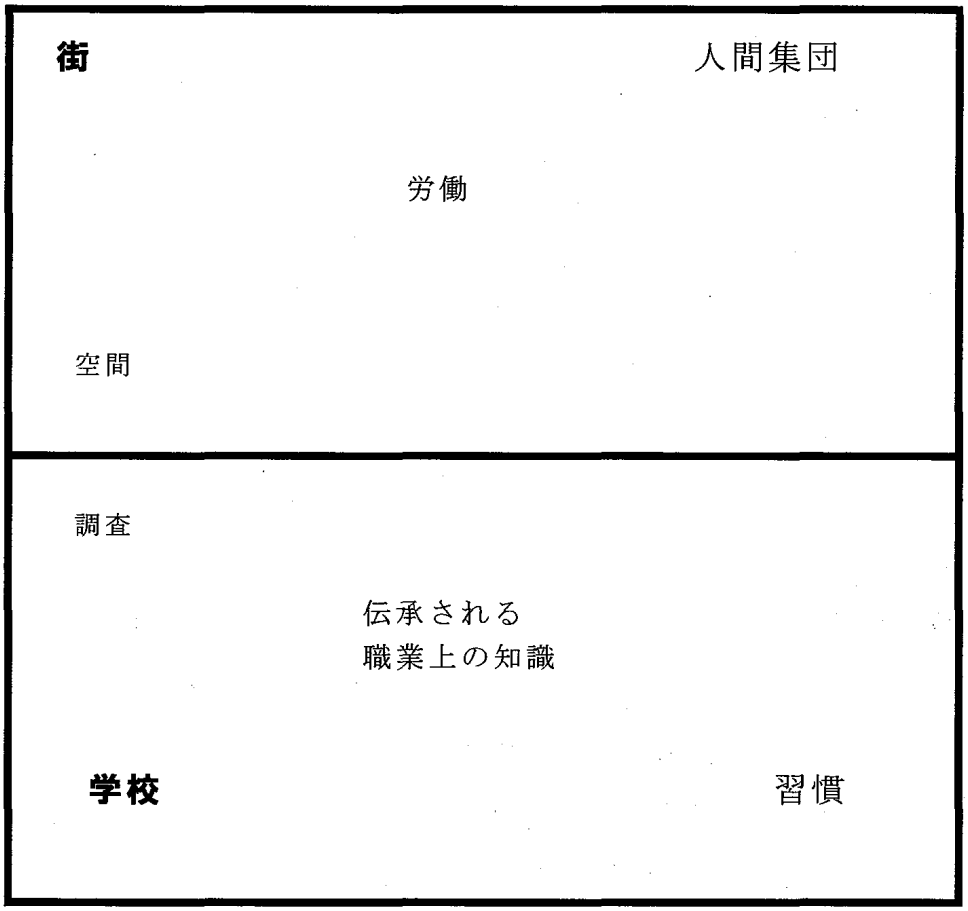
〔▲〕再度，最も適切な意味で言うと，どの集団もそれ自身の伝統を持ち，どの町もそれ自身の知の様式(スクール)をもっているのだ．

技芸史家 (the art-historians) たちは，ヴェネツィアやフィレンツェ，バルビゾンあるいはグラスゴーなどの都市に見られるような，その都市独特の特徴的な要素に関心を寄せているが，そうした特定の都市にのみみられる特別な要素を，同じ文明化の範囲内ではすべての都市の伝統と知の様式(スクール)は一致しているという，広く一般に流布した考え方になじまないものとして排除する必要はない．実のところ，最も広範に普及したもの――ローマ法から現代の無菌外科手術まで――でさえ，一般的な知の様式となる前は，ある地方に独特の知の様式 (schools) として起こったのである．

同様のことが一般的な社会伝統に関してもいえる．主要な職業とその分業形態，その細部における分化，そして，それらとわれわれ自身の日常生活との間に見られる様々な相互作用は，始めは無関係と思われていたが，今や女性の地位と密接に関連づけられているようにみえる．つまりこれらすべての要因は，両親の結び付きの様式だけではなく，子供に対する両親の関係性をも決定し，さらには，財産の相続様式を根底から規定することで，家族の構造をも決定するのである．

H. 〈町〉と〈知の様式〉の比較

われわれは今や〈町〉と〈知の様式〉との比較を要約し図示することができる*．図を見れば〔図表 2-4〕，それぞれ対応する要素が対称的に配置



〔図表 2-4〕

されていることがわかるだろう．この図は簡単な要約ではあるが，さまざまに応用することが可能であり，空欄を徐々に埋めていくことができよう．まず手始めにもう少し細かい図を提示してみよう〔図表2-5〕．図表の下半分，つまり〈知の様式〉に関する部分については，上半分よりも詳しい見取り図を描くことができる．これはこの分野のわかりやすさのためであるが，一方では，自然科学や地理学，経済学や社会科学の起源における主要な要素が，考えられているほどには明らかにされていないことを暗示してもいる．〈空間〉，〈労働〉，〈集団〉の主要な要素を詳細に記述した，前述の図表〔図表2-4〕もまた，これらのことを示唆している．図表の他の諸点はさらなる検討により明らかにされていくであろう．また，読者は自分自身の手で空欄を埋めることに興味を覚えるであろうし，そうした作業を通して思索を深めることができるだろう．

二つの図表〔図表2-4および図表2-5〕，単純なものとより発展したものは，以前概略を述べた図(scheme)，すなわち〈人々〉，〈行為〉，〈空間〉の図表〔E節の図表2-2〕とも比較可能であり，読者はこれら三つの図表を見比べることができる．つまり，〔図表がより精密になっていく〕段階

---

* 原注　議論を明確にするために，支配階級の起源に関する議論，すなわち，支配階級は〈人々(Folk)〉の中から生じたのか，それとも，外部からやってきたのかというような議論は割愛した．歴史を通じて継続的に現れ，また現在でも存在している，貴族と平民とわれわれが呼称しているものの対比については，この論文において触れるつもりはない．これらの起源の様式〔どのように現れたか〕はすべて，〈空間〉，〈労働〉そして〈家族〉，あるいはこれらの様々な相互作用とそれぞれ関連している．起源と状況を規定する要因として，以下のことが指摘できよう．第一に，人種の対立を伴った個人あるいは全体の移動．第二に，技術的な効率性と組織力．第三に，個人の資質と家系の血統．これに加えて，軍隊や行政の傾向，およびそれらに付随する制度的特権．諸制度の発展については，社会学的な著述家たちによって十分に取り扱われてきたので，ここでわれわれが論じる必要はないだろう．われわれの見方と同じように，諸制度や社会階級が取り扱われるならば，当面は十分である．

		支配階級 ↑ **家族形態**
	産業	
地域	労働－空間	（集団－空間） （町）
調査 ！－風景 ？－領域	職業－伝統	**学問** （集団－伝承的知）
↓ 自然科学 ↓	**応用科学**	社会科学
↓ 地理学	経済学	習慣 **道徳及び法**

〔図表 2-5〕

を辿ることにより，またより強調された文字により（あるいは紙面の反対側から〔次第に強調されていく〕文字を透かしてみることによって），〔われわれが示した〕地理学的で発展的な図式において，〈人々〉と〈行為〉に関する顕著な特質が徐々に明らかとなるのである．

〈人々〉の欄の縦列 (column) においては，習慣が道徳へと深化していく過程が示されている．強調されているのは，支配階級の勃興に伴なう法

の発展と，すでに道徳として広く流布している規範(standards)を法の中に取り込もうとする傾向である．事実，道徳的な慣習から法律へというのは，歴史においてよくみられる過程である．

過去においてと同様，現在においてもまた，われわれはこの図の中に〈空間〉，〈労働〉そして〈集団〉の様々な傾向――それらは各々，自然科学，応用あるいは技術的科学，そして最終的には社会科学を発展させる――と三者それぞれの一般化を書き加えることができる．

図に示されているように，一般的な地域調査が，写実的で原始的な意味合いの地理学から，地域やその環境についての状態やその状態をもたらす要素を様々に分析する，自然科学へと深化している――ただしわれわれは，これらの状態並びに要素が本質的に何なのかについて特に関心を持っており，このような点に関しては《地形分析(geolysis)》と呼ぶことにする――ところをみると，このような科学ならびに《地形分析》は，宇宙の進化を解き明かす，より高度な地形学へと再構成される傾向にあるといえる．

また，〈知の様式(School)〉に関する部分〔図表の下半分〕の真ん中の縦列，すなわち，〈労働(Work)〉に焦点を合わせると，科学の専門家やその学界が一様に見落としがちであるけれども，本質的に重要な歴史的過程――応用科学へと向かう〔「労働」に関する〕伝承的な知識の進化――が見えてくる．というのも，〔このように考えないと〕思考する小作農民として人々を救済するパストゥール(Pasteur)，タールの入った箱を用いて優れた無菌外科手術を行ったリスター(Lister)，あるいは，思考する鍛冶屋としてのケルヴィン(Kelvin)や他の電気技術者等々を，われわれは本当には理解することができないからである．《測量術(ars metrike)》――これは土地を計測する行為を起源としているが，エジプトのヒエログリフ（像形文字）で書かれた文書では土地の計測は「ロープをはりめぐらすこと」と表記されている――から発達した幾何学は，実際のところ，わ

れわれが想像する以上にさまざまな分野で応用されている．また，科学の歴史を振り返ってみれば，幾何学の原則が随所に応用されていることがわかるだろう．要するに，最も想像力に富む発見者としての独学の人は，真の基礎的な知の様式，すなわち，経験という知の様式の中から生まれたのである．

なお，このような過程を簡略化する必要から，遅かれ早かれ教育制度としての学校 (the school) が発達してきたわけであるが，ここでは，学校教育を導入したことによる数多くの成功と失敗とを，より十分に分析することができるだろう．

〈集団〉(Folk) の縦列を見れば，この過程はますます明確になる．小さな町や村，集落 (ton) あるいは家庭といった小規模な集団－空間 (folk-place) における，母親による子供の世話や婦人による知識の伝達から，古代の首都の王室や聖職者の法律の学校に至るまで，あるいは中世の大学の「人文科学」から現代の大都市の「法律学校 (Ecole de Droit)」まで，一連の本質的な進化の段階に沿って進んでいるといえよう．現在においては，総合大学 (university colleges) へと向かう現在の動向に対応して，初等，中等，高等といったあらゆる種類の学校が生まれているが，これらの学校から都市や地方の大学 (universities) に至るまで，改めて起源をさかのぼって調べることができる．したがって，教育の民主的な運営 (municipalisation) が実際に現れているといえる．

学校 (the schools) という言葉は，当初のものと最新のものとの間で意味に開きが出たままなのは明らかだが，現在の文脈においても用いることができる．

本論文で示されるような形式の都市の地理学的研究で，初めて本格的に応用されたものは，〔既存の都市計画に対する〕批判の様相を呈してきている．そして，可能な場合には都市計画の修正を促している．そうしたことから，アメリカの都市において，〔道路や建物等の配置があまりにも〕

画一的なマス目状になっており，例外がわずかにしか存在しないという事実は，非地理学的であるがゆえに非経済的かつ非技芸的であり，また地域の実態を考慮していないがゆえに非合理的であるということが，われわれの共通認識になりつつある．情報伝達の進歩にともない，物理学者の論点——共同体におけるエネルギーの節約に関する論点——が紹介されるようになっているが，それはまだ始まりにすぎない．燃料の節約，煙やスモッグの制限は，産業活動一般における，さらに効率のよい節約方法を確立するための前兆となっている．このことは生産者自身の効率性を改善するとともに，物理的エネルギーの単なる経済効率化から，組織的進化というより高度な経済性へと立脚点を変化させる．伝統的な経済学の慣例では，実際に労働者がどれだけ生産性を上げたかが唯一の関心事であったが，こうした考え方は次第に影を潜めつつある．それに代わって，経済学本来の観点であり，進化論者の観点でもある次のような考え方が見直されてきている．すなわち，産業における成功は，資本家による富の投資に対する見返りによっても，労働者の賃金によっても，また両者を合わせたものによっても全く測定できないこと，それはむしろ，具体的(コンクリート)な環境，家計，家庭の状況に伴う結果であり，結局それは，家族状況の展開——進化であれ退化であれ——と歩調を合わせる状態にある，というものである．都市(シビック)の結合体のなかで，幸福と進歩に本質的に影響を及ぼすと考えられている，産業集団あるいは典型的な制度の組織は家族であり，家族の状況には都市政府の活動，すなわち，都市の政治の成果が最も如実に反映されるのである．かくして，前述したような図表とその分析は，都市政治の進歩派と穏健派の両者の議論に対して，実用的な応用手段を提示することもできるのである．

政治から文化に話題を移そう．文化の必要性もまた，より明確になっている．いずれの共同体においても，地形や風景や建築技術の簡潔な説明から，産業や技術や科学の教育の複雑な発展に至るような，また，習慣的，

倫理的制度の保全と伝達のための学校や法や教会のような，類似した一連の文化制度を発展させている．空間，職業，そして家族は実際の世界と深く結びついているので，各々の文化的制度は，ますます全体としてみられているに違いない．都市（シビック）の改革者たちが，都市をさまざまな人々の行為や思考の社会的総合によって成り立つ，複雑な有機的結合体――それが健全であろうと病的であろうと――であると認識したならば，彼らは自らの理想をより現実的に把握することができるであろう．具体的な社会学としての理論的都市学 (theoretic civics) と，応用社会学としての実践的な都市学は，社会調査や社会福祉の分野で協働することで，さらに明確さを増していくことであろう．両者の協働は今や合理的と認識され，実際に多くの都市で広まっているのだ．

I. 知の様式（スクール）の発展と町（タウン）への影響

〈町〉に対する〈知の様式〉の影響を実際に観察すると，かなり多様な重要性があることがわかる．これらの多様さはどのように説明できるだろうか．

最も初期の段階から，知の様式 (School) は必然的に記憶されていくものの一つであり，たとえ〔町に住む〕個々人の資質が最高の状態にある時代においても，従来の生活 (town-life) を判で押したように踏襲し続ける．それはちょうど，ある時代における巨匠の作品が，人々の見識や記憶を形づくり，それが後継者の作品にまで影響を与え続けるようなものである．これらの記憶が惰性へと萎縮する一方，慣習として固定化されていくことは，技芸と伝承的技術 (crafts) 全般においてよくあることであり，また，〔人間の〕環境への対応という過程においても同様の経過がみられる．すべてのなかで，最も深刻なことは慣習や習慣への異常な執着である．それはついには「死のように重く，あたかも生のように深く，慣習がわれわれにのしかかる」ことになるのである〔ワーズワースの詩集「幼年時代を追

想して不死を知る頌」からの引用〕．ゆえに，新しい規範を道徳として人々の間に継続的に固定化していく〔根づかせる〕ことは非常に難しい．新しい規範を導入しようともくろむ改革者は，つねにこの困難に直面せざるをえない．また，改革者のもくろみが一定の成功をおさめた場合にも，〔その新しい道徳規準は〕目まぐるしい早さで活力を失い，形骸化してしまうのである．

過去の記録の記憶化として見なされている因習に縛られた「教育」について，どれほど権威があり古典であろうとも，その衰退を理解するのは容易であり，批判はすでに十分繰り返されたので，ここでわれわれが繰り返す必要はないだろう．

〔▲〕この過程に対して救済策はないのであろうか．観察へと意識を開放し，解釈へと知性を目覚めさせることで，科学が起こる．正確さの水準がかなり多様である旅行案内本から，地図や地名辞典まで，さらには地球全体や「普遍的地理学 (Geographie Universelle)」に至るまで，科学は〈空間〉から着手し，それを探求し調査する．科学的図表や記述を用いることによって，われわれは〔探求への〕旅の準備をより完璧なものとできるのだ．つまり，地図や計画を携えることで，以前は決して知ることのなかった，われわれ自身の空間 (place) を知ることができるようになる．いや，〔われわれは〕荒削りで不明確な空間を磨き込んで明確にし，歪曲された不正確な空間をまっすぐ正確に戻すことでわれわれの空間を修正できる．われわれの力で復旧することさえも可能なのだ．

〔▲〕同様に〈労働〉を考えてみよう．ある経験的に卓越した技術がその持ち主の死とともに消滅し，その後継者の獲得に失敗してしまう場合においても，われわれはこういった活動を最高水準のまま永続させることはできないであろうか．全時代と全領域から選りすぐった事例の集積――技芸財産の博物館 (museum of art treasures)――は，機械的な労役の低い水準から確実にわれわれを引き上げる．いや，これらの事例を注意深く観

察し，複写し，記憶し，そして正しく試験することで，われわれはそれらを模倣し，それらの卓越性を再生産し，日々の労働にそれらを適用することとさえできるだろう．われわれは技芸博物館 (the art museum) に〈構想術の学校 (School of Design)〉を加え，多少とも熟練した技能習得者の養成を行わねばならない．これらの新しい二つの制度が導入され，改良されていけば，過去の形式の模倣やそうした模倣のつぎはぎから生まれた新しい形式が広く普及することになるだろう．これらの制度は近代労働の技術的要素や技術労働者の精神に応えるものであり，模範や手本をわれわれに供給してくれるのである．さらに，過去のさまざまな技芸を科学的に等級づけることにより，若者は未熟で無教養な時代から技芸知識と資格化された技能を有する時代へと至る，技芸の進歩を容易に学ぶことができるだろう．われわれの言う〈構想術の学校 (School of Design)〉は〈技芸の学校 (School of Art)〉になり，そしてついには専門大学 (College) となって，教育の分野において指導的な役割りを果たすようになるのだが，そうなっていくことは，この制度の推進者に満足を与えるだけでなく，一般公衆やその代表者の満足にもつながり，こうした制度はますます賛同を得るようになるだろう．時には制度に対する潜在的な不満が表明されるかもしれないが，それは取るに足らないものであり，実際的な障害となることもないだろう．

〔▲〕技芸の蓄積や教育についての事例は，他の領域にも当然，影響を与える．例えば，一般的な商業情報——それぞれ異なった代表的なものを展示すること，これは本来国際的なものなのであるが——は，自然にそれら〔の事例〕を連想させる．帝国と植民地の利害関係が拡張されるとすぐに，それに対応して不変的な〈展示 (Exhibition)〉が制度化される．しかしさらに商業制度が発達している場合，われわれは，あらゆる同業組合（クラフト）と同業団体（ギルド）の産業についての主張を認めなければならず，また実際には共同体一般からの技術的な要請をも認めなければならない．こうして，技術的

制度は過去，現在，そして将来へと，より完全なものとなっていくのだ．

〔▲〕そのような真に百科全書的な知の様式（スクール）の体系が次第に浮上してくるとき，総合大学 (university) は永久に忘れ去られることはない．われわれは当初から観察力と記憶力における知の様式の本質的な要素を認識しているのだから，試験――筆記，口述，実技――によるこれらの〔要素の〕検討を，いかに細部では〔まだ〕改善可能であっても，公平に認めるべきである．したがって，試験を課する主体および大学は，包括的な教育体系の規範的王者 (crown) として認められるべきなのである．しかしながら，教育は特に試験への必要性を急速に増してきているように思われる．このことに対して密接な関連を持つのは，〔われわれの図表の〕最後に残された縦列，すなわち〈人々〉についての縦列である．人々の間で受け継がれてきた知恵や知識――それが信仰に由来するものであろうと，体験や経験に由来するものであろうと――や，歴史，文学，そして評論など，過去の〔〈人々〉の〕知識は，既に積極的に活用されているし，〔そうでない場合でも〕さまざまな形で過去から相続した知識として適切に位置づけられている．その一方で，物質，資源，状況，そして環境は別種の要因として作用している．社会学研究へと接近しうる可能性という点では，新しいロンドン大学だけが飛びぬけているといえよう．

〔▲〕海運業，商業，そして工業，さらには多くの住宅地や政府のある大ロンドン (great London) の傍らに，小さい都市における場合と比較すれば緩慢ではあるが，より大規模かつ完全な形で，学問研究の包括的体系が成長してきているのだ．〈労働の万国博覧会〉的状況 (International Exhibitions of Work) や〈空間の自然博物館〉的状況 (Natural History Museums of Place) に始まり，現在の予期された大きさへと至る，今世紀後半のサウスケンジントンの歴史的発展は，それが徐々に進んだものであるがゆえに，現在の視点とその分類に対して注目すべき例証を与えてくれるのである．

学問研究の発生やその性質および欠点は，われわれが提示した方針によって，上手く取り扱うことが可能なことが十分に説明されたことと思う．そこで，われわれはさらにもう一歩踏み込んで，思想や生活（ライフ）がその欠点にどのような手段で対処していけばよいのかを問うことはできないだろうか．その欠点とは特に記憶の異常な固定化であり，最善の言い方で言い直しても，悪い意味で中国的であり，また，どこにおいても生起してくる，試験やその類似物の邪悪な側面なのである．

J. 「学校（スクール）」から「修道院（クロイスター）」へ

前述の見解は依然としてあまりにも純粋に決定論的である．理想，個人，組織といった概念を，それらが都市 (city) の機能や構造および物理的環境に対してどう反応するかという観点から，位置づけなければならない．なぜなら，町に組織的労働が発生し成長するとともに，知の様式も発展し，習慣や慣習が法さらには道徳性にまで高められるような場合においても，われわれが先ほどみてきたように，共同体は固定化した慣例に陥り，衰退してしまうからである．これを避けるためには，批判と建設という二重の思考過程が常に必要となる．この二重の思考過程とは，経験に由来する概念 (ideas) を常に批判的に選択し続ける一方，他方においては，それらを〈理念 (Ideas)〉として統合していくことである．そしてさらに，これら〔〈理念〉〕をより大きな思考の総体，すなわち，新しい種類の「弁証法的統合 (Synthesis)」へと組織化していくことである．この批判精神はイスラエルの預言者たちやソクラテスの問いかけを生み出したものであり，今日においては新聞や雑誌の批評などにみてとれる．一方，建設的努力は，伝統的な専門研究を行う学校や有用な情報を伝達する場において行われている．それは新しく再構成されたという意味で，科学 (science) の一つであり，また，哲学の一つでもあり，そして何よりも理想 (ideals) の一つなのである．

法を教授する学校(the Schools of the Law)から，これを乗り越えようとして預言者たちが出現したように，技術・応用科学や記述的な自然科学から，あらゆる領域の知識を再解釈し，純粋科学をわれわれに与えてくれる科学的思想家たちが出現するべきである．彼らは単なる国土調査とは異なる純粋幾何学を，また，単なる解剖ではなく形態学をわれわれに示してくれるだろう．プリニウス〔古代ローマの学者で主著は『博物誌』〕またはゲスナー〔「近代のプリニウス」とも称しうる16世紀のスイス人の博物学者〕からディドロ〔フランスの啓蒙思想家・作家で百科全書派の代表的人物〕またはチェンバース〔イギリス人．ラブレーの百科全書の発想に最初に着手する．主著『サイクロペディア』〕に至るまでの，単に具体的であるに過ぎない百科全書の代わりに，広大な知識についての主観的認識，つまり哲学的体系がいまや出現することになる．同様に，単なる観察や記憶は詩のイメージへと形を変え，必要以上に技芸家(アーティスト)的な比喩的描写が技芸そのもののために生み出されるのである．単なる模倣——これは絵画においてはよくみられるものであるが，幸いにも音楽ではまれである——は，芸術(アート)の分野においてずっと誤用され続けてきたわけだが，ようやくふさわしい場所——記述的な科学の分野における図像学(iconology)——へと回帰しつつある．

したがって，われわれは過去から現在までのあらゆる種類の知識を対象とする〈学問研究(the Schools)〉から，瞑想と思考，想像を行う場所である〈修道院(Cloisters)〉へと目を転じよう．歴史家とともにわれわれは，かつての〈修道院(クロイスター)〉——それは当時の〈善〉，〈真理〉，〈美〉の概念から，そしてこれらの概念がさまざまに評価され調整された結果，生じたものであるが——を探求することができるだろう．こうした〈修道院(クロイスター)〉がいかに現在を表現しているか，また，いかに未来に役立つ可能性を持つかを問うことは，現在われわれが直面している限界を突破するために，非常に重要であることは明らかだ．まずは，都市生活において，〈修道院〉とい

うこの古臭い(アンティーク)名称のもとで一般化されうる歴史的空間を認識し，また同時に，その実際的な必要性と〈修道院〉となりうる潜在的な空間を多少とも認識することができれば十分であろう．〔〈修道院〉と呼ばれる思索の場所においては〕〈町〉の物質的生活に関わる根本的要求や，あらゆる観察や情報，常識や経験，習慣や慣習，道徳や法さえをも含む〈知の世界(Schools)〉の日常性を伴った健全さを超えた，ある種の必要性と実用性が存在する．それは規則や先例に見られるよりももっと深い倫理的洞察，技術的な経験や経験に基づいた技能に由来するものよりもさらに広い自由な知的視野，単なる空想ではない想像力を獲得することの必要性であり実用性なのである．町(タウン)の増加や拡張，その質の向上や低下，また学問研究の増加と質の向上の時代において，社会学者が歴史から学ぶことは有益なことと思われる．彼は歴史を学ぶことにより，その時代の思想の世界を改変するのは，〈修道院(クロイスター)〉が生み出した三つの要素――理想(ideal)，理論(theory)，イメージ(imagery)，これらはそれぞれ感情，理性，感性に関わるものである――の新しい結合の様式であることを，よりよく理解できるであろう．

学園の小さな森や歩廊で思索にふける古代の哲学者，修道院で研究に没頭する中世の修道僧は，通常認識されている以上に，近代の科学的思想家に似ている．なぜなら，彼は，依然としてその大部分において，テーベ〔古代ギリシアの都市〕の隠者やディオゲネス〔古代ギリシャのキニク学派の哲学者〕のような孤独な個人主義者だからである．私はこの孤独な個人主義という要素が，近代の科学的思想家たちが思っているほどには，彼ら自身の心的態度から拭い去られてはいないと確信している．一方から他方へと「忍耐強さのいる知的作業(travail de Benedictin)」を伝達するのは，単なる言語の作用ではない．やや不適切な言い方かもしれないが，いずれの修道院もさらに悪い状況に陥るのでなければ，遅かれ早かれ単なる学問研究(school)へと後退してしまうのだ．

〈修道院〉の衰退は学問研究の発展と関連しているが，自身の内部からも引き起こされたと思われる．想像や概念は邪悪であり，理論は虚偽にすぎないと考えられるようになったからである．修道院的なもの〔理想・理論・イメージ〕の衰退は，宗教や哲学，さらには技芸の分野でも起こったが，あえて説明する必要もないほど，そうした事例は歴史上にありふれたものとなっている．近代の研究者は自身の科学や自分自身に対し，次々と出てくる同種あるいは類似の病原菌に免疫があると考えるべきではないだろう．

（古谷真一朗訳）

K.　都市の概念 (THE CITY PROPER)

さて，「ようやく」，われわれは都市の概念 (city proper) を議論するところへとたどり着いた．都市は，空間 (place)，労働 (work)，集団 (folk) から構成される単なる〈町〉とは異なる．たとえ〈町〉の経済が最高度に発達していたとしても，それは都市ではない．ここにさらに〈学校〉——それも最高度に発達した——を付け加えたとしてもまだ十分ではない．修道院を付け加えたらどうだろう．これによってかなり都市に近づくが，しかしそれでもまだ十分ではない．修道院それ自身は〈都市〉ではないが，そこにみられる人間関係の理想，世界と人間を関係づける理論，こうしたことすべての技芸的表現や描写，これらは遅かれ早かれ，人々の人生観や行為に影響を与えるものである．プラトンのアカデミア，アリストテレスの学園，中世の修道院や近現代の研究所，それらは創造力に富み，多くの成果を産み出し，都市の生活——彼ら自身は都市の生活から一定の距離を保っていたのであるが——に大きな影響を与えてきた．そして，修道院が産み出した三つの要素——理想，思索，イメージ——の新しい結合〔の形式〕は，世界を変え新しい時代を切り拓く．新しい啓示やヴィジョン，思考の様式，新しい詩歌の勃興，これらはその時代々々の人々を

動かし，予想もしなかったような新しい方向へと人々を導いた．人々はただ経済的な必要性や外的な強制力によって動かされたのではなく，また，学術的な思考によって動かされたのでもなかった．もっと微妙に，まるで振動する音響板の上に置かれた砂が，バイオリン奏者の弓の動きにつれてその姿を変えていくように変化していったのだった．

習慣がモラルへ，そしてさらにモラルが成文化された法へと単純に発展していくわけではない．習慣やモラル――すべてでなければその一部――は，物事のよりよい状態を阻害する要因として，今や学校（スクール）においておおっぴらに批判されている．規制の習慣やモラルに対する批判を通して，理想がより明確に形成されていくにつれ，慣習や法に対する理想の倫理的な超越性が明確になっていくだけでなく，理想を実現しようという要求も高まっていく．こうしたことは，理由の明確さやヴィジョンの鮮明さの程度に応じてさまざまなレベルで起こりうるが，文学のなかにそうした例をみてとることができる．プラトンの共和国やモアのユートピア，これらは修道院（クロイスター）文学の標準的かつ典型的な作品であり，かつて世界に計り知れない程の重要性をもたらしたものであったが，現在でも同様に，町（タウン）や学校（スクール）の忙しい日常の世界を超えた何物かに目を向ける助けとして必要とされている．われわれの理想，われわれの「神の都 (Civitas Dei)」，「太陽の都 (Civitas Solis)」〔「神の都」は聖アウグスティヌスが論じたものを指す．ここでは「神の都」「太陽の都」の両方をあわせて，理想の都市を表現している〕は実現可能なものでなければならない．というのは，われわれはかつてのプラトンのポリスのように，その実現に向けて真摯に計画をたてうるだけでなく，古代から現代のコミュニティにいたるまで数え切れないほどの試みがなされてきたように，もちろんそれらのすべてが成功したわけではもちろんないのだが，勇気をもってその実現に取り組みうるのである．現代の大規模な産業地域や長期間にわたって人々が居住し続けてきた地域においては，新しい出発といったことが以前ほど簡単ではなくなってきて

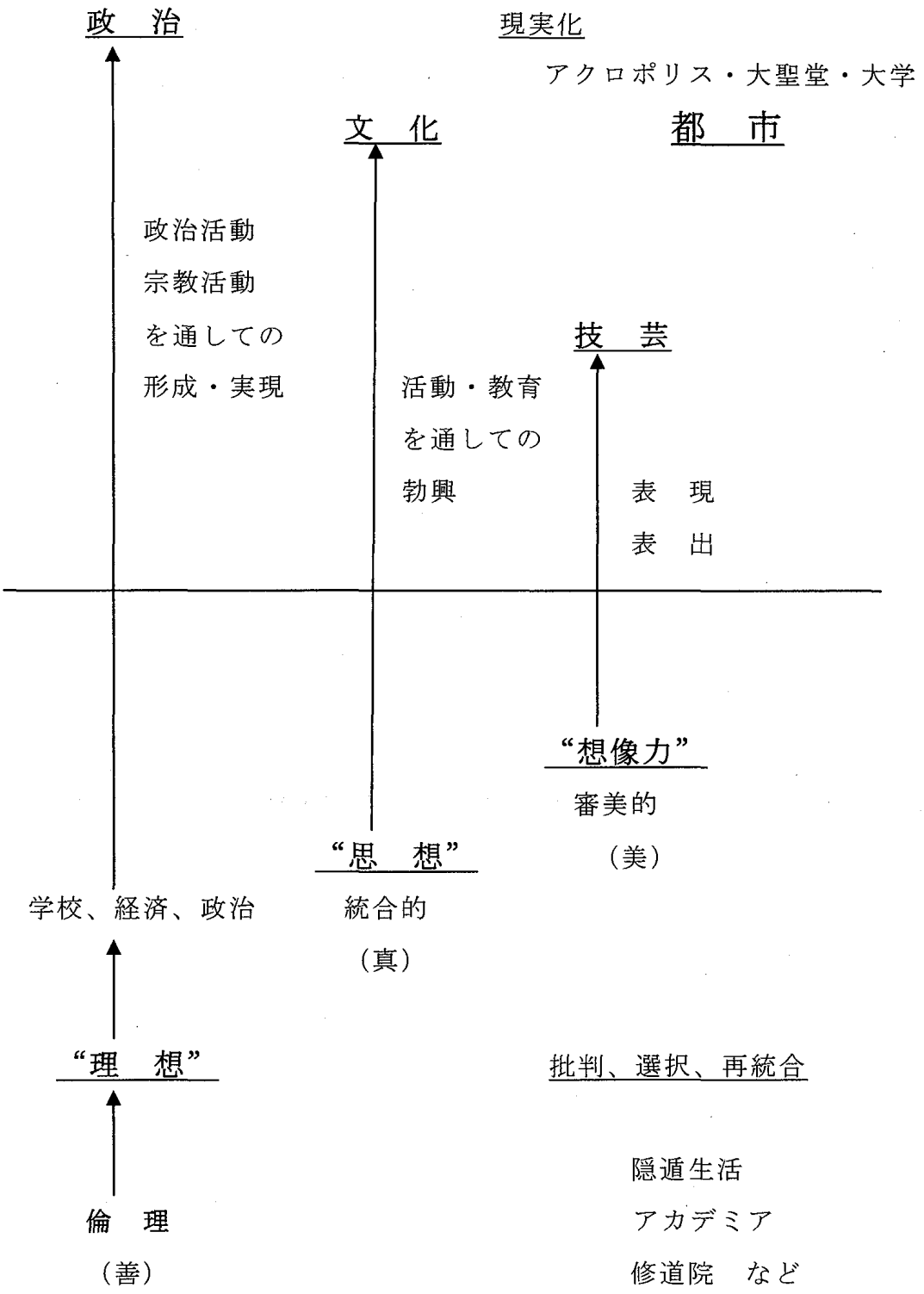
いる．しかしそれにもかかわらず，原理はいまだに有効なのである．それはわれわれの政治やシティズンシップの理想，それを実現するわれわれの能力の中に生きつづけている．そして，都市の概念はそのなかに含まれており，都市はそこから生まれるのである．もう一度確認しよう．われわれはただ単に経験から物事を考えるだけでなく，明確になった考えを行為や教育に投影する．だからこそ，修道院の哲学や長く静かな修練から，文化的なるもの (brotherhood of culture) や都市の文化的側面 (culture city) が誕生するのだ．同様に，技芸(アート)においても，われわれはもはや自然をそのまま模倣したり，伝統的な様式をそのまま採用したりはしない．技芸(アート)は，ブロンズや大理石に神のイメージを刻んだり，焼け焦げ崩壊した丘にパルテノン神殿を再生するといったことのなかにその姿を現す．一般的に言うと，学校(スクール)で行われているように，心的なイメージを外的な事実にあわせて修正するのではなく，われわれはその過程を逆転させる．われわれはそれがよいにしろ悪いにしろ，新しい技芸の概念によって外的世界を，あたかも印章の下の蜜蝋のように，変形してしまうのである〔西洋では溶かした蜜蝋に印章を押し付けて文書に封をする〕．ゆえに，音楽家の修道院や礼拝堂から，芸術家の小さな工房から，詩人の写本室から，都市を再生する建築家 (orchitect) が出現するのである．彼は卓越した表現力を駆使しつつ，都市の形態およびモラルの再生，すなわち，都市の新しい物質的・精神的パワーの再編を通して，都市を再構成する．この点で，都市(シティ)そのもの (the city proper) といえるのは，古代ではアテネのアクロポリス，エルサレムの寺院，ローマのカピトリヌスの丘〔神殿〕とフォーラム〔公共の広場〕などであり，これらは古典的で主要な例といえよう．また，中世においては，荘厳な大聖堂が挙げられるが，その他にも，市庁舎，鐘楼，ギルドの集会所，大学，大邸宅，噴水，広場，さらには当時の面影を色濃く残す街路や中庭，家々なども忘れてはならない．もう一度，教育の発展の歴史に戻ろう．われわれは錯綜する大学 (university) の歴史を解きほぐす手

段を手にしている．大学は今の昔もその基礎を学校制度(スクール)においているが，それと同時に，地域的あるいは一般的な伝統およびそれらと調和するあらゆるもの，確定された事実などにもその基礎をおいている．しかしながら，大学の本当の前身は，思索と研究を行い，解釈と体系化にいそしむ修道院(クロイスター)なのである．さらに発展するために，大学は豊かな社会的活動，すなわち，「選ばれた若年層と選ばれた老年層」の活気ある親交――これは大学がその名に値するものとして生き長らえる期間を決定する――を永久に更新していく必要がある．

まとめよう．町(タウン)は，学校(スクール)の利点とともに，ますます明らかになりつつある学校の限界をも取り込んできたわけだが，その限界は修道院(クロイスター)によって矯正されうるものである．これと同様に，市民意識(シティズンシップ)に関する訓練においても，修道院は一定の役割を果たすことができる．理想というものが生き残っていくためには，確実に根づくこと，すなわち，実現されることが必要である．人間はその生涯のなかで，「孤独な瞑想にひたること，しかし一方では，世俗の世界に生きること，人類に奉仕すること」を求めるのである．

L. 完全なる都市――町(タウン)，学校(スクール)，修道院(クロイスター)，都市(シティ)

われわれは，四つの要素からの分析を進めてきたわけであるが，出発点であった地理決定論とは全く逆の，それを補完するような結論へと至り，前述したような理由により今まで触れなかった，人々(people)，仕事(affairs)，空間(places)の三つの要素を含むおなじみの理論（E節を参照）に対応した見方へと戻ってきた．したがって，歴史上の「英雄史観(the great man theory)」が再び登場してくる．つまり，われわれは今や，最初のテーゼに対する明確なアンチテーゼへとたどり着いたのだ．そこで，これらを統合するために，すべての要素を一緒に考えてみよう．G節〔図表2–5〕では，町と学校の決定論者的見方を提示したが，ここでは〔図表


政　治
現実化
アクロポリス・大聖堂・大学
文　化
都　市
政治活動
宗教活動
を通しての
形成・実現
技　芸
活動・教育
を通しての
勃興
表　現
表　出
“想像力”
審美的
(美)
“思　想”
統合的
(真)
学校、経済、政治
“理　想”
批判、選択、再統合
隠遁生活
アカデミア
修道院　など
倫　理
(善)

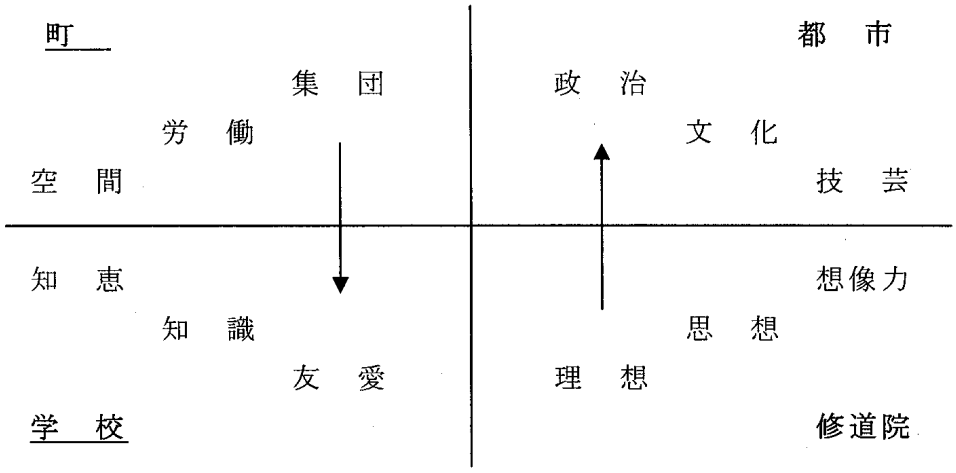
〔図表 2-6〕

2-6 および図表 2-7〕，修道院と都市についての補足的な説明をしよう．さまざまな論点があるなかで，たった一つの論点にこだわり続けるべきではないだろう．読者はこれら二つの図の間にあるページを折返すことによって，本を開いたまま二つの図を一緒に眺めることができるだろう〔原文では図表 2-6 が 87 頁に，図表 2-7 が 89 頁に掲載されている〕．

都　市 技　芸	修道院 想像力
文　化	思　想
政　治	社会　経済 理想 倫理
人間集団	法 モラル
労　働	知　識
空　間 町	調　査 学　校

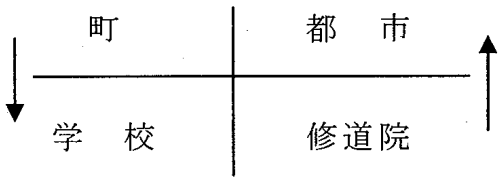
〔図表 2-7〕

さて，ここにきてようやく，われわれはこの論文のエッセンスを単純な図にして示すことができる．〔図表 2-8〕



〔図表 2-8〕

さらに単純化すると次のようになる．〔図表 2-9〕



〔図表 2-9〕

それぞれの矢印が反対方向を向くことはない．この公式 (formula) を，前述したような異なるタイプの町（第 1 報告〔B 節〕を参照），あるいは現在の町に適応することは，それほど難しいことではない．しかし，修道院が学校になってしまうことがあるように，それぞれの時代の都市が，多かれ少なかれ，単なる新しい町に成り下がる，あるいは退歩するという考え方にも考慮する必要があろう．町（タウン）や都市（シティ）はそれぞれの過去の発展および現在の状況により区別されるのである．

ま と め

この長いけれども圧縮され短縮された一連の分析を，1 頁分のまとめに集約するためには，われわれは簡単に都市生活 (civics) の主要な側面およ

び部門について，現在の観点から定義しておく必要がある．そこでまず，第一に，基本的であり，なおかつ常に新たな形態をとっている，規則的な発展——地理的，経済的，人類学的な発展——の結果としての都市生活(civics)について研究せねばならない．つまり，空間(place)，労働(work)，集団(folk)に関する調査が必要になるわけである．これらの要素は人口調査や諸統計のなかでばらばらに処理されるのではなく，また前述したような諸科学が部分々々を担当するというのでもなく，生命を持った共同体，人間の巣，すなわち，町として考えられねばならない．

町の客観的で有機的な活動に対応して，われわれは基本的かつ主観的な生活を再構成していく．個々人の生活は，町という人間の巣の活動の基本的な——そして部分的な——反映であり記録である．よってここでは，町のあらゆる一般的・特別な環境および機能，例えば家族の型とその発達などが考慮の対象となる．それらは外部から流入してきた文化や衰退しつつある古い理想により覆われているが，基本的には地域固有の知識や技術的な伝統，血縁関係や仲間同士の思いやり，習慣や慣習，さらには，それらがモラルや法へと発展していく過程のなかに見出される．空間，労働，人間集団に対応するものは簡単にはみつからない．しかしながら，次のようなことが示唆できよう．あらゆる知の様式の本質的特質である，空間の知恵(place-lore)，労働の知識(work-lear)，人間集団における友愛(folk-love)は，一般的な社会的通念の発生およびその教育的な発展と密接な関連をもっているのである*．もちろんここでは，現存する教育機関がこれらを正当に認識していないことは問題としない．

* 原注　lore〔知恵〕という言葉は，もともと経験的であり，感覚から派生するような意味合で従来用いられてきた．ゆえに，ここでもその意味に限定して使用するのがよいと思う．そして，さらに古い言葉であるlear〔知識〕を用いることとする．lear〔知識〕という言葉は，いまでもスコットランドでは正確な意味合いで用いられているものであり，知性的かつ合理的，しかしながら慣習的でもあり，また職業的でもあるような意味が込められた言葉である．

これら三つの言葉，知恵(lore)，知識(lear)，友愛(love)は，さらに深いレベルにおいて，それぞれ判断力，知性，感情と密接に関連している．そして，それらは明らかに，想像力，理論，理想主義――修道院の本質的特質であるとすでに定義されている――と関連している．詩歌，哲学，精神的覚醒や再生の過程についての心理学的考察は，今日，個人的にも社会的にも別の角度からなされているが，ここではこの問題には立ち入らない．

さてついに〈都市(シティ)〉の特質が明らかになった．都市の固有性は，理想がどのようなかたちで表現され，どのように社会生活や政治と調和していくか，また，思考がどのように文化のなかに統合されていくか，そして，隠遁者の書斎や小部屋から生まれた美(beauty)がどのように技芸(アート)の世界へと移し変えられていくか，そうした方法や形式により決定されるのである．

実践的な結論

都市(シティ)を調査することは，理想の都市生活(シティズンシップ)の実践へとつながる．つまり，社会調査は社会的施策(サーヴィス)を準備することになる．それは，治療や衛生のための診断のようなものである．そして，こうした調査から，われわれは新しい知識や認識を確実に得ることができるのだ．社会観察，および，より適切な社会観察のための観測所(observatories)の設置の次には，社会活動や社会活動を行う機関(laboratories)の設置，少なくともその萌芽を植えつけることが必要である．簡単にまとめると，われわれは一種の保護施設(シェルター)*のようなものを必要としているということである．そこでわれ

* 原注　都市生活(civics)のあらゆる分野における多くの機関やその従事者(workers)の存在，および，この社会学会のような学術的な団体や社会に関する調査の存在，さらには，社会活動に従事する尊敬すべき機関やその従事者たちの努力や試み，そして，それらの社会団体(Social Union)や奉仕団体(institutes of Service)といった組織への統合の動き，こうしたことすべてを考慮した上で，私は学術的な活動と実践的な活動という二つのタイプの活動が一つになる必要があると主張したい．すなわち，都市博物館(civic museum)と実践的な活動の拠点(active centre)が一つになる必要がある．エディンバラにある私の「展望塔(Outlook Tower)」はこの種の試みの最初のものであると自負している．これはまだ初歩的な段階のものにすぎないが，社会学者と市民の双方にとってためになる機関の一つのタイプを示唆することができるだろう．

われは，かつて咲き誇っていた花々の最良の種子を集め，種をまき，苗木を育て，きたるべき夏に花を咲かせるための準備をするのだ．われわれは明らかに，それぞれの都市にこうした調査と活動を行うセンター，いわば，社会学者と市民のための都市センター (Civicentre) を必要としているのである．

M. 歴史的都市複合体

さて，読者は〈町〉や〈知の様式〉の分析といったものは，著者が想定するような単純なものではないという批判をお持ちのことだろう．古代都市 (antique towns) の調査は，かつての修道院や神殿，大聖堂や広場といった遺跡，あるいは少なくともその痕跡を明らかにしてくれる．つい最近まで，あるいはもっと以前においては，プロメテウスの火のように画期的な発見であったものが，産業化の過程のなかに取り込まれ，繰り返され，短縮され，今日では職人の日々の決まりきった仕事になってしまった．われわれの家を飾る陳腐な装飾品も，かつては美の輝きを放ち，何かを象徴するシンボルとして重厚に，あるいはきらきらと輝いていたのである．これは毎日の習慣や制度についても同様であるし，また，言語についても——われわれの言語である英語についても，それ以外のほとんどの言語についても——同様である．もちろん，こうした事実は，学者や古物収集家，歴史家やかつての文献学者，地理学者から今日の社会学者など，さまざまな人々の調査によって明らかにされたものである．こうした調査の結果をみごとに使いこなしたスペンサーの手腕は実にすばらしいものである．さて，では，物事が年輪を重ねていくプロセスと，われわれが試みている都市 (cities) の分析との間にはどのような関連があるのだろうか．別の言葉でいうならば，都市の歴史的な発展のコースをどのように解釈したらよいのだろうか．つまり，繰り返される成長と衰退，進歩と退歩，過去の痕跡に満たされた現在の状況，そして，そこに見出せる可能

性，こうしたことをどう考えたらよいのだろうか．（この論文で提示された）4つの要素による分析は，原則として，最も原始的な村から永遠の都ローマ (the Eternal City) のような大都市まで，あらゆる形態の人間集団の分類に適用できるものであるから，この疑問はより重要である．この点については，実際，われわれはすでに，つつましい小さな村落と基礎的な職業を持つ原始的な谷間地区から始めて，おおよそのところをたどってみた〔第1報告A節を参照〕．

さて，われわれは四つの要素による都市の分析を進め，都市生活 (city life) の特質を論じるところへとたどり着いた．次にわれわれは，新しい頁を開いて空間 (place)，労働 (work)，集団 (folk) についてもう一度確認しなければならない．これらの活動 (acts) の最も単純化された部分は，図表にみられるようにまさに歴史の過程を表している．図表の頁を閉じてみると，「修道院（クロイスター）」は「学校（スクール）」に，大聖堂や広場すなわち「都市（シティ）」は「町（タウン）」に折り重なる．すなわち，特定の時代や世代，都市における理想や成功は溶けてなくなり，次を担う世代の人々の目には入らないのである．消えつつある過去の残滓は，何らかのイメージや，少なくとも暗示によって，かすかに痕跡をとどめてはいる．しかし，継承者たちにとって，幸か不幸か，新しい頁はほとんど空白に近い状態にあるようにみえるのだ．つまり，歴史の頁はパリンプセスト〔書いたものを消してまた書けるようにした古代の羊皮紙のこと〕のようなものなのである．ゆえに，われわれの近現代の町も，たとえつい最近まで草原にすぎなかったとしても，かつてなにもない空虚な場所だったわけではなく，良くも悪くも過去の伝統のなごりに満たされた場所だったのだ．われわれの町にたつ新しい建物のほとんどは，過去の技芸――それは現在では学生だけが興味を持って客観的な過去の記録のなかに見出すようなものであり，町の生きた歴史のなかにはほとんどその痕跡を残していないようなものであるが――の空虚な抜け殻でしかない．このことは同様に，「文法学者の埋葬 (Grammarian's Funer-

al)」〔R. ブロウイングの詩．世俗の楽しみには目もくれず古典研究に身をささげたルネサンス期の学者の生き方を，その弟子が回想するというもの〕以来，文字通り死に瀕している，古典の研究や学習の衰退についてもあてはまる．また，都市の生活に関わる，考えることなく繰り返される手順，機能しなくなった習慣や慣行，法律や儀式などについても同様のことがあてはまる．都市の衰退や停滞について，われわれはその実例を古代の東方世界に求める必要はない．そうしたプロセスは，個人の老衰や死亡と同様，毎日，至る所で繰り返されている．

それゆえ，新しい頁には「町（タウン）」と「学校（スクール）」の新しい，そして，より錯綜したかたちが記されていく．継続する「都市（シティ）」といったものは存在しない．一般的には，「都市」はせいぜいそれを作り上げた世代が存在する間，あるいはそれよりもやや長く存続するにすぎない．もっとも，「都市」の歴史的な繁栄は，落日の残光のように町の上にその輝きや魅力を長く放ちつづけるかもしれない．そして，それらがやがて衰退し，住人たちが消え去り，壁が崩れ落ち，さらには，その場所そのものが土に埋まり忘れされた後も，人々の記憶のなかに長く生き続けるかもしれない．われわれが想定する歴史的な都市は，こうした永遠と忘却の間にある衰退と滅亡のさまざまな段階のなかに見出される．より本質的な，そして，より実際的な意味において，都市（シティ）はただそれ自体を実現する場合においてのみ存在するといえる．ゆえに，われわれにとって理想の都市とは，未来においてその姿を現すものなのだ．理想の都市はあらゆる町に潜在しているということ，このことがわれわれの議論のまさにエッセンスなのである．今日，われわれは，現在の状況に適応可能な理想を産み出す，修道院（クロイスター）のような場所をどこに見出すことができるだろうか．今，必要とされているのは実践的な倫理であり，総合的な哲学であり，科学であり，ヴィジョンや想像力であり，そしてこうしたものすべての表出なのである．〔そして，そうしたものは修道院のなかから生まれてくるのである．〕

N. 都市の害悪——疾病，貧困，悪徳，犯罪

これまで，私は町(タウン)の理想についてたくさんのことを述べてきたが，その害悪についてはほとんど触れなかった．その主な理由は，異常なことについて認識する，ましてやそれを取扱うには，通常の発展のコースを理解せねばならないと考えたからだ．使い古された慣用句に，生理学は「医術の教科書 (the institutes of medicine)」というのがあるが，社会学は「市民の教科書 (the institutes of citizenship)」とならねばならない．

慈善家はこの事実を忘れがちであるが，治療の前には診断が必要である．都市の害悪については，われわれの仮説の性質のゆえに特別な調査が必要となる．この調査は通常の空間 (place)，労働 (work)，産業 (industry) の調査と同様，徹底的に行われねばならない．統合を求めるのは，われわれの最も継続的かつ知的な衝動であり，それゆえに，一見まとまりのあるように思える，安易な説明がしばしばまかり通ってしまう．例えば，改革派のある学校では，社会的害悪の原因を第一に不摂生，第二に貧困，そして第三に贅沢と説明したりしている．タマニー派〔18世紀，ニューヨーク市に設立された民主党の政治団体．市政を私物化したことから政治腐敗の代名詞となる〕やその他の政治団体，社会主義や個人主義などにしても，害悪を非国教徒や教会のせいにしたり，無知や科学の蔓延のせいにしたりするのだ．こうした説明は漠然としており，真実のかけらなどどこにもないのは明白である．

わたしは都市の害悪について全く別の説明をしたいと思う．それはもっと全般的なものであり，それらすべてを，そしてさらにそれ以上のものを含むという点で，前述のものとは区別される．つまり，害悪は「町 (Town)」そのものが不完全なものであるということのみならず，前述した「学校 (School)」，「修道院 (Cloister)」，「都市 (City)」という三つの要素それぞれがさらに不完全である，すなわち，無秩序で腐敗しており未発達であるということに由来するのだ．これらの不完全な要素が単独にあるいは

複合的に市民生活のなかに現れてくるため，日々の営みのなかに潜むあるいは現れる害悪は，人間の集団が今に至るまでずっと苦しめられてきたような，社会的害悪となってさまざまな形で噴出する．

それゆえ，疾病や苦痛，無知や欠乏，悪習，犯罪にそれぞれ別々に取り組んできた人々は，次のように考えるべきであろう．これら四つの害悪は，一緒に考えるべきものであり，さらにはかなりの程度までまとめて対処しうるものであると．それらは互いに関連し，影響し合い，われわれが今まで論じてきた四つの要素の理想的な状態に対して否定的に働いている．実践的かつ学術的なあらゆる種類の学校（スクール），思索のための修道院（クロイスター）――倫理的かつ社会的な理想主義，統合された科学と哲学，創造力と劇（ド）的な出来事（ラマ）の場であり，これらすべての要素を政治，文化，芸術といった都市の本質へと止揚していく場としての修道院――をもつ健全な町（タウン）の理想的な統合のために，われわれはここでそれぞれの要素に対応する欠点について詳細に検討しよう．

都市における日々の営みのなかに現れる害悪は，大幅に再解釈されうる．それにより，われわれはより効果的にそれらに対処しうるのである．都市の貧困，不潔，醜悪さ，疾病や不摂生，無知，無気力，精神的な疾患，悪習，そして犯罪，これらに対しては別々に対処することが可能であるばかりでなく，次第に明確になりつつある公衆衛生 (civic hygiene) という概念によって対処することも可能なのである．この公衆衛生という概念には，最も広い意味において，物質的なことから，モラルに関わること，経済的なこと，理想に関わること，実用的なこと，技芸的なことまでが含まれる．

さまざまな分野で，よりよい都市生活を目指して運動している熱心で有能な人々も，彼らの特別な関心や仕事が，有機的統一体としての都市（シティ）という概念のなかに包含されるということがわかれば，希望をもつであろうし，その活動もより効果的になるだろう．〔有機的統一体としての〕都市

は固定的なものではなく流動的で，われわれの理解を超えた原因により，進歩あるいは退歩のプロセスを歩むものであるが，都市には地理的かつ文化的に，より高度な完成に向けて努力しうる一定の発展過程があるのである．

近現代の町は，本当の意味での，紛れもない苦難の場所〔煉獄〕である．しかし，希望がないわけではないし，希望を抱くことも可能かもしれない．そこでは，より低い理想主義とより高い理想主義が争っていて，それぞれの表出と成果がぶつかり合っている．実際，現在の都市において，われわれ自身，地獄のような苦しみとともに天国のような悦楽を経験している．また，ある人たちの身にふりかかる暗い運命を，別の人たちの奮闘やふくれあがる希望を，そして救済 (redemption) を目のあたりにしているのである．

思慮深い読者ならばみてとれるだろうが，中世の卓越した詩人の言葉〔ダンテの『神曲』をさす〕には，熱烈な市民意識（シティズンシップ）の表明——それは都市生活の長い歴史における最も輝かしい瞬間の一つといえる——が含意されている．この表明は，追放された市民の自伝的な思考の流れに沿って，さまざまな段階において繰り返される．幼少期をすごした故郷，その地方独特の風土，少年らしい愛と希望，活発な政治活動（シティズンシップ）と党派間の争いから，こうしたことすべての変容に至るまで，あらゆる段階において繰り返されるのだ．そこに見られる神秘的なヴィジョンや人間らしい野心は，世俗的でもあり宗教的でもある．修道院における信仰や哲学から生じたものは，多方面にわたる文化のなかへと流入していった．強烈な象徴的ヴィジョン (symbol-visions) を通して，こうしたことすべては不朽の詩歌へと変形されていった．

ここで私は「神曲 (Divina Commedia)」を，都市のガイドブックとして示唆しているのだろうか．そのとおりである．ただし，初心者にとっては必ずしも有用とは限らないけれども．しかし，一体だれが「神曲」なし

にフィレンツェを語ることができるだろう．ベデカー〔ドイツのカール・ベデカーが創刊した旅行案内書〕やマレー〔イギリスで発行されている旅行案内書〕だけでは十分とは言えないのだ．膨大な量にわたるブース氏の厳格なロンドン統計調査をひもとく人は，その学問的な蓄積と科学的な抑制とともに，その行間にダンテ・サークルのおもかげ〔ダンテの時代から継承され続けてきた市民意識（シティズンシップ）のこと〕を読み取ることができるだろう．読者が視点を変えて別の要素を汲み取ってくれるなら幸いである．

（三上真理子訳）

0. 都市の象徴とそれが意味するもの

しかしながら都市に関する書物は，ベデカーからブースまでの観察型の新しいものもあれば，ダンテのような解釈型の古いものもあり，網羅できないほど膨大かつ多様である．先ほど挙げた図表は二元的な――より正確には四元的な――都市からなる複雑な構成をしていた．この四元図式における第一のもの，つまり日常生活の場としての町における日々の労働へと立ち戻ろう．学校や修道院といった主観的な次元，および都市そのものという高次の次元を考慮せずに町における労働だけを取り扱うとすれば，この四元分析の正当性はどのようにして確証されるだろうか．決定的な説明の一つを示してみよう．ここで提示するのは，単に論理的な枠組――それが図表を用いた簡潔なものであろうとも――ではなく，通貨という一つの象徴である．この象徴は具体的かつ芸術的なものであり，また生活-労働 (life-labour) や思考-表示 (thought-notation) の形態をとっているという点で，記憶にとどめやすいものである．通貨という象徴は今日では大都市ロンドンに君臨している．「銀行地区」はロンドンの中心拠点となる行政区の座を継承し，重要度において公会堂や大聖堂，さらには要塞や宮殿までをも凌駕している．そして，それには「シティー」という名誉ある名称が与えられている．いかなる時代いかなる地域においても，貨幣制度は具

体的かつ社会的な有用性を歴史上の事実をめぐる記述と結びつけ，両者に象徴的な示唆を豊富にもたらすものである．正確にいえば，貨幣制度は単に町や《学校(school)》の表れであるだけでなく，思考(thought)——私の用語で言えば《修道院(cloister)》——の表れでもあるのだ．

ここに私自身の故郷の古い「硬貨」がある．硬貨の表面には鉄床のかたわらの鍛冶屋が描かれており，その足元には同業組合の「戦争によってではなく芸術によって(Non marte sed arte)」という標語が刻み込まれている．ここには高度な産業を有する「町(Town)」およびその「学校(School)」が明確に，先に定義したとおり正確に表現されている．他方，裏の面にはローマ帝国の双頭の鷲が翼を広げている．パース(Perth)(Bertha aurea)〔スコットランドの都市パースはローマ時代にヴィクトリアと呼ばれていたが，ローマの撤退以降，バーサ（ケルト名）やパースと呼ばれるようになった〕はかつてローマ帝国領土における最北の属州都市であったために，中世の紋章官はパースが以前に「ヴィクトリア」と呼ばれていたことを誇らしげに思い起こしたことだろう．鷲の胸部には盾が王族の旗のように飾りつけられている．というのもパースは1457年の「王の悲劇」まで首都だったのである．ただし盾にはたくましいライオンの代わりに子羊が，都市の聖人である聖ジョンの御旗のもとに描かれている．ここにも，封土の貴族と度重なる抗争を繰り広げてきた〈王と平民〉の古都にふさわしい「王のため法のため人民のため(Pro Rege, Lege, et Grege)」という標語が見られる．この硬貨は，明らかに無思慮なままに考案された少額硬貨であり，取るに足らない片田舎の名目貨幣に過ぎない．にもかかわらず，このような硬貨の上には，先ほどから扱ってきたような都市生活をめぐる四元分析および総合が長きにわたりはっきりと描き出されてきた．産業の〈町〉を生み出しそれを維持するために，鉄床での精力的な産業よりも適したものがあるだろうか．町の工芸学校，特有の様式や技能，平時であれ戦時であれ町の生活に対する影響などを表現するの

に，路地裏の鍛冶場ハル(Hal o' the Wynd)〔ウォルター・スコットの1829年の小説『美しきパースの娘(The Fair Maid of Perth)』に登場する鍛冶の名人ヘンリー・スミスのこと〕よりも適したものがあるだろうか．プロメテウスからケルヴィンまでの平時における経験伝授の象徴として，あるいは皇帝の時代から近代における大砲鋳造までの戦闘の象徴として，金槌というこの原始的で平凡な道具よりも適したものがあるだろうか．〈町〉および〈学校(スクール)〉から〈修道院〉へと，すなわち隔離された場所での安寧と瞑想の生活――生活をめぐる実践的な問題はまさにここから更新されていくのだが――に話を移すと，御旗に抱かれた子羊よりも明快で歴史的かつ神秘的な象徴が存在するだろうか．また，都市生活の表現として，ローマ帝国の鷲――その目つきは鋭敏さを，翼の羽ばたきは力強さを表している――に匹敵するものがあるだろうか．

このような都市の象徴は完全とは言い難い．先述したような都市の四元図式によって本論文の主旨を基本的には言い尽くしてしまった以上，もはや気にかかるのはこの象徴だけである．現代における明白な「科学の進歩」や特に社会研究における疑いようのない進歩においてみられるように，人々は物事について新しいやり方で考えるようになっている．そこにいたるまでに，われわれの祖先がわれわれに劣らず明晰かつ通俗的にそれらを生き，それらを表現してきた．われわれがそれらを再び生きているということが，不思議なことに同じ象徴によって改めて表現されている．というのは，象徴が再び登場したのはそれが芸術的な形式においてふさわしい形で蘇ったからなのである――つまり新しい〈公共図書館〉で市民の協賛のもとに行われたローカルな美術工芸品展における記念の賞与メダルという形式で．それが述べている都市の出来事の四元的な完全さを明らかにするためには，この最後の一文を多少なりとも吟味することが必要であろう．

古い硬貨において見たように，鍛冶屋とその標語に対応するのは町と学校(スクール)である．同様のことは，図書館を記念して地域特有の芸術工芸品とし

て再発行された硬貨にも見出せる．そして，標語のなかでも賢慮深く壮大なものには，反省と決意によって特徴づけられる修道院が対応する．都市の改良運動へとむかう新たな衝動が，記憶の学校としてだけでなく今日における開放的な修道院としての図書館と関連していることを確認しておこう．さらに，この衝動というのは，もはや「芸術(アート)のための芸術(アート)」のような美的な目的のためだけでもなく，教養ある少数者による職務遂行なのでもない．それは文化や芸術と都市行政の再統合を暗示している．メダルの鋳造には，市の組織や行政，芸術と文化の新たな融合を伴ったこのような都市生活(シビックライフ)の刷新が最も適切な機会であろう．それらの出来事は今日ではもはや例外的ではなくなっているために，われわれはその重要性をあやうく見誤りかねない．しかし未来のペリクレスが登場するとすれば，それはまさしくこのような都市の発展を通じてのみ可能なのである．

われわれの分析は，都市の歴史によって事後的につくられる構造的なものであるだけではない．それはひとたび文化的な問題へとむけられるならば，日常的な都市の生活が果たす近代的な機能に対しても応用可能なのである．また都市生活は，とうの昔からわれわれの理論を先取り的に具体化してきただけでなく，明らかに理論を追い越している――というのもそれらは生活や実践において言葉よりもはるか巧みに理論を表現しているのだ．抽象的な図式や具体的な描写によってかわるがわる説明するというこのような見慣れない方法に対して，読者は苛立ち，それらが普段の生活や経験からはあまりにも乖離していて取るに足らないものだと感じることであろう．しかし彼らは，日刊の新聞が提供する社会生活についての豊富な記述を用いて，都市についての最新の理論を検証し，修正しているのだ．

硬貨の「裏の面」は職人と鉄床からなるつつましいものだが，「表の面」は鷲と子羊からなっており，世俗的かつ宗教的な理念主義を表しているということを最後に記しておこう．このことの妥当性はもはや明らかなはずである．

このように化石についての科学のただ中から貨幣学〔古銭学〕が息を吹き返してきた．貨幣学からわれわれのありふれた貨幣制度までの――とくにフランス，アメリカ，スイスの貨幣制度までの――移行は容易であり，しかもそれは古典期や中世期といった最も高貴な都市の過去の制度よりも優れている．ともかくここでの私の関心は，労働や人々の日々のローカルな細目へと向けられている．というのも，日々の産業や学校が現在よりも価値のある理念へと開花すること，またそれらが生活と実践のより高尚な水準へと結実することが，そのような細目に明確に刻印されているからである．そこに表現されているのは〈人々(People)〉，〈行為(Affairs)〉，〈空間(Places)〉という定式（E節）を用いた都市についての一般的な観点が根本において信頼に足るということであり――〈空間(Place)〉，〈労働(Work)〉，〈人々(People)〉という基礎地理学的な規則化に見られる，より科学的な方法と比べるとしばしば未熟であり細部では秩序立っていないにもかかわらず――そのような観点は依然として有効であるということである．というのも，客観的な規則化は確かに重要なものではあるが，いかなる時代においても最も重要であり続けてきたのは，客観的規則化と補完関係にある主観的な進化なのである．われわれの概念枠組は，地理学による外面的な図式を心理学による内面的なものと融合させなければならないのだ．従来の表示の順番を図のように変更することでそれを図式的に表現してみよう．

町	都市
学校	修道院

↓

都市	町
修道院	学校

〔図表 2-10〕

P. 都市の発展をめぐる予測——その特殊性と一般性

このような都市の二元的あるいは四元的な発展が，現代における多くの町や都市において大幅に進展したということはできない．というのも，明らかに現代の町や都市には，修道院や大聖堂，学園や城砦の近代的な対応物をほのめかすような理念が十分に示されてはいないからである．近代的な町がどれほど巨大で，多くの人口を抱え，従来の経済水準からすれば豊かになったとしても，その規模や豊かさはたかが知れており，大目にみても都市と比べて秀でているということにはならない．都市の進化をめぐる四元図式に従えば，町や都市の発展は，かなりの部分において個別の（なぜならば地域的なのだから）ものであり続けてきたし，おそらくこれからもそうであろう．仮に人間の個別性がそれぞれに唯一無二であるならば，都市についてはなおさらそういえるはずである．

ダンファームリンという具体的な事例において，すでに私は都市のユートピアの実現にむけた重要な提案と，実現のための建築デザインをも示しておいた*．その結果，地域的な研究や地域性に適合したデザインが個別の都市にとって——実際は都市の各々の場所にとって——いかに重要であるかが明らかになった．このようにしてのみ，真に進化論的な都市の発展——地域の特性や，その長所や，場所・職業・人々の可能性などを活用した発展——を望みうる．もちろん他の都市を例示することによってこれらを補足することも不可欠である．しかし，もし仮に当該地域に適さないのであれば，他の要素がどれほど優れていたとしても，模造の制度によって地域の生活を圧迫してはならない．様々な場所において地域の生活へと目がむけられ，地域生活の状態に対する理解が統治者の間で高まることで，ピカデリーに炭鉱学校をつくったり，サウスケンジントンに工業学校をつくったりすることはなくなるだろう．エディンバラの行政長官たちは，風

* 原注　筆者の『都市の発展』(1904年)を参照せよ．

通しのよいカールトン・ヒルに桑を植えたり絹栽培を取り入れるという昔ながらの試みからは久しく手を引いてきた．しかし実際には，避難してきたユグノーの絹職人たちがに働き手になっていたために，これはきわめて道理にかなった試みであったのだ．

同様に，われわれはオックスフォードをオックスフォードとして，エディンバラをエディンバラとして発展させなければならない．もちろん，規模にかかわらずヨークやウインチェスター，ウェストミンスターやロンドンのような都市についても同様であり，チェルシーやハムステッド(Hampstead)，ウーリッジ(Woolwich)やバターシー(Battersea)についてもそうである．このうちバターシーは単なる辺鄙な教区委員会から真の活力を有した内的な進化の中心へ，さらにますます多方面に広がる関心と模範の中心へと成長してきた．これらすべては明らかに一個人の思慮深い指導力――ないしは彼の懸命かつ熱烈な市民意識（シティズンシップ）――によって，一世代を費やさずになされた．バターシーの有名な公園は時折，大聖堂や公共広場の近代における類似物を熱心に提示してきた．都市（シビック）の発展は，街路を「オスマン化」することであろうと人々を機械的に教育することであろうと，ただの外面的な問題というわけではない．都市および市民意識（シティズンシップ）の真の進歩とは，外部からのよどみない衝動に対して敏感でありながらも，内部から成長し開花するものなのである．

しかし国内的な利害，国際的な産業，商業，科学，進歩が今日ではますます大きなものとなってきているため，われわれはいくつかの都市に共通する何らかの発展経路を結論的に予測したり，歴史的にその経路を一般化してもよいだろう．例えば都市の多様な個性を分類するための古典，中世，ルネサンスといった類型に分けることである．

都市の歴史学的調査を扱った先の論文〔第1報告B節の帯状の図〕においてすでに示しておいた古代の，現世の，そして現代の進化について思い起こしておこう．ここでわれわれは，疑問符が付されて後回しになって

いた問題へと立ちむかわなければならない．すなわち，実際には明瞭にとまではいかなくとも未来における事物の秩序を示し，たいていは明示されていないとしても現存の秩序にすでに出現しつつあるかもしれない進歩の要素を見定めんとする必要があるのだ．そのような要素は近い将来に，われわれが気づくかどうかは別としても成長していくであろう．

過去における起源への遡及と現在における日常的な観察という特徴を持つ現代科学は，科学において最も重要な基準と成果は過去を読み解くことでもなければ，現在を記録することでもなく，ましてや過去と現在を解釈することでもないということを見落としがちである．科学が行うべきなのは予測することである．予測を通じてのみ科学は活動(action)を促進することができる．現在の作業は未来へと向けられており，われわれが考慮しなければいけないのはこの点についてなのである．「予見するために知る，行動するために予見する」というコントの有名な格言は，社会的かつ政治的な領域一般のみならずわれわれの都市研究においても妥当するのではないだろうか．航海術においても機械工学においても，農業においても衛生学においても，予知と準備の必要性が高まりつつある．これらは単に基礎科学と専門職業の融合のみならず，明らかにより広範な社会的要素をそこに含んでいる．

周知のとおり，物事を熟知しているときに予言するのはたやすい．われわれが幼児期あるいは成長期に行うのはこのようなたやすい予見である．人は成長し花が開くのを見過ごすことはない．しかし，夏の葉が真冬のこの時期でさえすでに芽生えに備えており，9カ月前にはもう胚芽していたことを，たいていの人はほとんど気にも留めていないのではなかろうか．葉の成長の端緒は見落としがちなほど些細で，つぼみの期間は成熟期の二倍にもなる．このような事実に対する社会的な類似物は多様で，考慮に値するものなのだ．

ルネサンスや中世，古典，さらにそれ以前から受け継がれてきた歴史的

要素はきわめて重要である．と同時に，現在では産業主義と自由主義，帝国主義と官僚制，金融とジャーナリズムなどの勢力や理念が支配的であると認識することはもちろんだが，これらすべての葉の下につぼみが隠れていて，徐々にではあるが芽吹きつつあるのを見逃すわけにはいかないだろう．このつぼみは，やがて来るべき季節には今日よりもはるかに重要なものになるに違いないのだ．いま学業に就いている人たちが次の世代を担うとの主張は，主に教育関係の会合ではお決まりのものである．しかし，誰がその先駆者となるのかをわれわれはどれほど識別しているだろうか――彼らがすでに同時代人であったとしても．われわれは先駆者の気配がすでにそこかしこに漂っていることを，いくらかでも目にしているのかもしれないのである．

このような点において，都市は著しく異なっている．他のものと比べるとはるかに進取的なのである．先の論文（第1報告〔B節〕）では，個人や組織，制度がいかに過去のあらゆる発展段階を表しているかをみておいた．様々な都市において，それらは大きな影響力を有し，不可欠の特徴を付与している．ここで探究を進めて未来の都市――ただし一見するとその開花の兆しはまだわずかしかみられないのだが――について考察してみよう．

先に示した例を思い起こすと，その年齢からして当学会のおそらくすべての会員の方々が，バターシーから何らかの成果を得ることができるのだろうか，と疑う気持ちがあったことをお忘れではないだろう．さらに，セントルイス (St. Louis) において〔1904年の〕万国博覧会を筆頭に数々の文化的な要素が急速に成長したが，これらの成長を予測しえた人などヨーロッパのみならずアメリカにおいてすら数年前には皆無であった．

数年前には，シカゴが〈旧世界〉やニューイングランドに代わって，救いがたいほどに物質化されたコミュニティの代名詞となった．近頃ではバーミンガムやグラスゴーが高い位置を占めつつあり，さらには，今や

ニューカッスルやダンディーなどかつて抜きん出ていた古い都市が，これらの都市に追いつき追い越すときなのかもしれない．しかしこれらの趨勢はまだ漠然としており，もっと明確にする必要がある．そこで，グラスゴーの具体例を用いてより明確にしてみよう．

Q. 都市の推移の典型事例としてのグラスゴー——「旧技術期」から「新技術期」まで

私は20年以上も前にウイリアム・モリス(William Morris)によって，グラスゴーが，伝統文化という点ではエディンバラの方が優れているにもかかわらず，真の革新性という点で単にスコットランドの都市の一つであるにとどまらず，英国全土における最も主要で進取的な都市であることを鮮烈に教えられた．グラスゴーの卓越性は彼にとってその自治体事業にあるのでもなければその未熟な状態にあるわけでもない——もっとも，彼はこのような発展を「ロンドンの人々は社会主義について実体験なきまま語る．しかしグラスゴーでは，社会主義など知らない人たちが社会主義者なのである！」と表現している．確かにラスキン(Ruskin)はグラスゴーの醜さをきわめて不愉快に感じ，マシュー・アーノルド(Matthew Arnold)はグラスゴーのみすぼらしさに対して全著作を通じて激しい軽蔑の念を表明してきた．しかしモリスは，自身の工芸職人としての知識や熟練技能への敬意から，グラスゴーを高く評価した．クライド(Clyde)川に造られた船舶は彼によれば「聖堂の時代以降の，人類による最も偉大な成果」であり，実際にはそれらを凌いでさえいる．というのも，船舶はあらゆる物質的な芸術と科学の込み入った結合と「協同」を雄大かつ有機的な全体へと導き，モリスの社会的理念の本質である労働者たちをも全体的な総合へと導いていくからである．

このような理由によって，驚くべきことにモリスが主張する社会の再組織化は，彼が熱烈に望んだように，「テムズ川流域よりもクライド川流域

で迅速に」行われつつある．彼はロンドンの進化について失望する主な理由について，西地区と東地区，北地区と南地区が互いに離れすぎていることのみならず，土地利用の分化が行き過ぎていることをあげている．そこでは，あそこは金融に，あそこは工業に，ここは娯楽にといった具合なのである．クライド川流域では対照的に，造船の性質上，産業の組織化と社会進化が協調して発展しているのだ．

モリスの時代以降，彼がほとんど知りえなかったような地域特有の芸術の復興運動が，少なくとも我が国では優勢なものに，国外の批評家にいわせれば卓抜なものになってきた．ラスキンが，グラスゴーからの講義の招待に対して「まず汝の都市に火を放ち，次いで汝の川を清めよ」と容赦ない応答をして以来，新世代の建築家や衛生学者は都市をほとんど変えることなく，厳しい基準によって川を浄化してきた．蒸気機関の発明に大きく関わり，世界各地で起こった産業革命に結果として寄与することになった都市および大学が，一世紀後に電力の操作へとむかう応用科学の卓抜な主導者を生み出したということは偶然の一致ではない．産業の実践の時代に相応する理論である政治経済学が，アダム・スミスという偉大な先駆者にして古典的な主唱者をもつように，理論の進歩傾向についても少なくともその徴候くらいはみつけることができるのである．

原始時代における文明や産業を学ぶ学徒たちのおかげで，われわれは長らく石器時代として知られてきた時代を二つの時期——数少ない粗末な道具を未開人が荒っぽく使用していた前期と，道具が多様化し，その形状が洗練され，刃先がより鋭利となり，厳選された素材からなり，より上質となった後期——に区分する彼らの再解釈に親しむようになってきた．洗練された道具は，高等なタイプの人間によって巧みに使用され，生存競争のあらゆる方途において——狩猟や戦闘は希であり平穏な農業における技術ではあったが——行き渡っていた．時代や人を旧石器期と新石器期とに区分するやり方は，社会学的な科学の用語法や現代的な会話の中にさえ転用

されてきた．近代の〈産業期〉として大雑把に括られがちな時代に，類似して観察される進歩に焦点をあてることはやり過ぎだろうか．近代の産業期という並はずれた時期における発見と発明は，物質的な進歩の時代を形作るのであり，規模と重要性の面で，プロメテウスのような謎めいた人物が活躍していた先史時代に匹敵することは，誰もが認めるところだろう．産業化の進展度の低い文明から高い文明への進歩を明確に特徴づける必要があるのだ．この進歩は，初期の《旧技術 (Paleotechnic)》段階から，後のより発達した《新技術 (Neotechnic)》段階への移行として大まかに表現できる．もし定義が必要ならば，石炭，蒸気，安直な機械製品，それと対応する「富と人口の進歩」という《量的な》理念に特徴づけられる，いくぶん粗野で浪費の多い技術の時代から，効率のよい天然エネルギーの広範な運用や電力利用の増加によって特徴づけられる，あるいは衛生や教育や社会政策などの技能と芸術によって表現されている《質の進歩》という理念の勝利に特徴づけられる，より高度な文明への進歩として大まかに定義しておくことができる．

〈新技術〉の段階は，現代の多くの都市において今でも量的にきわだっている旧技術期の秩序に完全に取って代わったとは言い難いのだが，より高次の進歩の徴候を見せ始めている．例えば造船のためになされた産業間の調整や，都市建設の偉業という考え方を蘇生させた近年の発展がある．先の時代を特徴づけていたのが技術的に比較的未発達な労働者と熟練工の優位であったのに対して，その後の未来を特徴づけるのは厳密な意味での労働者を統率する人や，正真正銘の《工作者 (architectos)》もしくは建築家の登場，彼の仲間である純朴な徒弟，庭師や森林労働者，農夫，灌漑耕作者，そしてそれらの発展型である文明化された技師たちである．

この段階に対しては《地球技術 (Geotechnic)》という用語がふさわしいだろう．ここではそれに対応する理論的および理念的な展開に立ち入る必要はないが，以下のことだけは述べておこう．これらは同様に総合的な

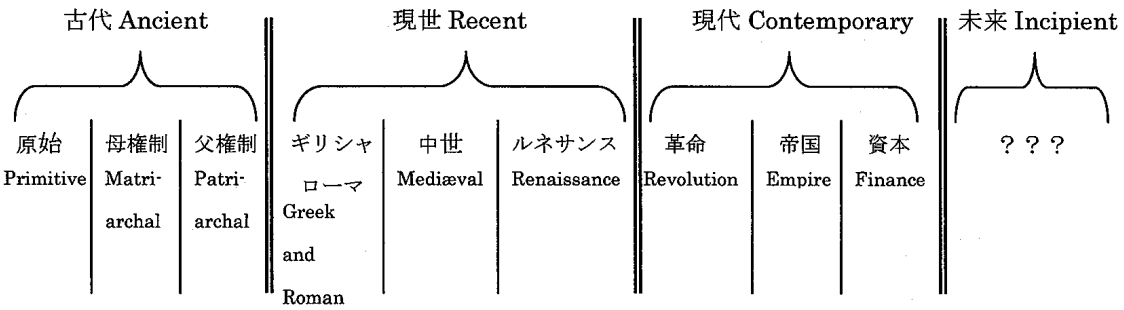
性質を持っており，具体的な側面では地理学に，より抽象的な側面では科学的な分類と哲学に位置づけられるような統合的な科学なのである．もっとも，思考の抽象的および具体的な発展はますます徹底して進化論的な性質を帯びてきているのだが．

しかし進化論的な理論は，包括的になればなるほど起源や単なる分類に満足し続けることはできないし，人間よりも自然 (nature) に注目することにも満足することはできなくなる．自然は結局のところ進化における舞台装置に過ぎず，人間こそが舞台上の英雄なのである．その結果，〈地球技術 (Geotechnic)〉の段階つまり〈総合的な (Synthetic)〉時代には，人類の進化とかかわるさらなる進歩がもたらされる——それによってすべての物事が人類に従うことになる．一方，これらの先立つすべての産業的な段階においては，たとえその傾向は次第に減じているとしても，「物が人を乗りこなす」〔アメリカの思想家エマーソンの言葉〕のが常であった．地球技術 (the geotechnic) という時代は，政策においては今や明らかに進化論的なのだが，理論において，および環境においては《優生学的 (Eugenic)》なのである．さらに，理論的には未熟ではあるが《優生心理 (Eupsychic)》という用語によって，ここで提起したい語句が出揃うことになる．

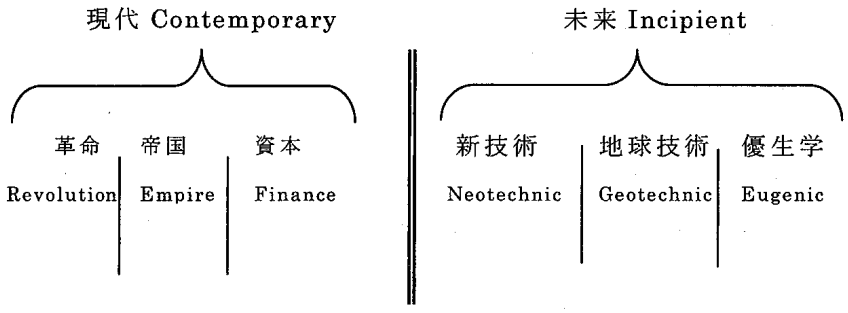
来たるべき未来というわれわれの考え方はますます確かなものとなってきた．というのも，明白に予見されていたあらゆる段階がすでにわれわれの前に現れつつあり，社会の生長，あるいは手短に言えば都市の発展として現に観察されているからである．

まとめよう．先に示した図（第1報告B節〔の帯状の図〕）の「？？？」の部分がようやく埋まるのだ．

図〔図表2-11〕の左半分つまり〈古代〉と〈現世〉はいったん横におき，〈現代〉と〈未来〉の段階に多くのスペースを割いてみよう．するとこのようになる．



〔図表 2-11〕



〔図表 2-12〕

この図をさらに精巧にすることはもちろん私の手に余る．しかし，このような図式的な概略をより洗練された形で使用しつづけることは，現在起こっている出来事の探究や，教育や都市改善という実践的な仕事に際しても十分に有益なはずである．私はこの図式を，試す価値のあるものとして他の方々にも推奨したい．

R.　実践的な提案——都市博覧会

理論としての都市学 (civics)——すなわち上述したような都市の観察——とわれわれの道徳的な理念 (ideas) や実践的な政策——すなわち〈応用都市学 (Applied Civics)〉——とをどのようにしてより十全に関係づければよいのだろうか．われわれは理念を精選し，観念を明確にし，計画を成熟させ，そしてこれらすべてを応用しなければならない——このことは政治や文化や芸術においては実現されている．しかし，もし実際に都市調

査と都市行政の十分な相関関係について考えるのであれば，どのように両者の普及と向上を推し進めていけばよいのか．この場で私は学会に対して，この点について考察し議論することを実践的に提起したい．そしてもし許されるならば，ここにおられる方々にはそれを町や都市に対して，また，組織や公衆に対して進言していただきたいと願うのである．

さらなる提案をさせていただきたい．今，この場所で――実際に兆しがあるならば他の場所でもよいのだが――〈都市学 (Civics)〉と〈優生学 (Eugenics)〉を統合すべきではないだろうか．そして，優生学についてゴルトン氏が熱烈に待望してきたような大規模かつ具体的な方法で，これらの統合をわが国の民衆に提示するべきではないだろうか．〈都市学〉については，1904年の夏にセントルイス万国博覧会の市民セクションで提示されており，またドレスデンでも近頃，町の博覧会が，そしてパリや他の場所では，同様の〈博覧会〉と〈会議〉が開催されている．

これらの端緒となったのは，1900年のパリ万博であり，そこには社会の秩序をめぐる重要なセクションやそれと関連する数々の特殊な会議が設けられた．これらのうち，ここでは特に公衆の関心をひき各都市に刺激を与えた《公共芸術会議 (the Congrès de L'Art Public)》に言及しておこう．というのも，そこでの重要な〈博覧会〉では大陸の数多くの都市が有益な展示を行ったのである．

他の博覧会を取り上げてもよいかもしれない．わが国を除くほとんどすべての先進的な国々では，偉大な現代の博物館やそれと関連して開かれる会議のおかげで，都市学をめぐる重要な問題が公衆に対してはっきりと提示されている．

われわれの学会は，議長であるチャールズ・ブース卿，キャノン・バーネット (Cannon Barnett) 氏，ホースフォール (Horsfall) 氏，ならびにご活躍の市政活動家 (civic workers) の皆さん，さらにわれわれの委員会の方々や委員会を組織する幹事の方々と協力しながら，都市学の教育と活動

を推進していくことだろう．

ここでさらに二つの事実を思い起こしてみよう．わが国や他国で行われてきたあらゆる重要な博覧会において，(1) 古代都市の視覚的な再現と，かつての都市生活の展示，(2) 町の生活の現状や，それを改善するための資源と手段の調査，この二つよりも有益で人気を博した展示があっただろうか．

このような「町の展示 (Towneries)」が利益や有用性において，すばらしき「漁業の展示 (Fisheries)」や「保健衛生の展示 (Healtheries)」，あるいはロンドンの記録と記憶をめぐる優れた展示をも凌いでいるかもしれないと言わせていただこう．この展示の利点をはっきり指摘することは簡単なのだが，概括するには数が多すぎるので，今はあえて具体的に提示することは控えておこう．代わりに，要素，方法，計画，規模について精査することによって，都市学の全般的な問題を提起し，それを明らかにしておこう．

われわれは，社会の転換期である今日では，旧来の分断や党派性，セクトや学派の境目が溶けてなくなり，新たな可能性が出現してきていることを多少なりとも感じている．そこでは新たに配置された思考や行動が続々と現れている．まちがいなく都市の博覧会はきわめて有益であろう．都市の進歩という来たるべき再生(ルネサンス)のためにも，私は都市の博覧会*を提案したい．

このような博覧会のカタログには，都市学の文献を分類した都市百科事典 (Encyclopaedia Civica)（第1報告F節）がおおむね相応しいだろう．

---

* 原注　第一報告が世に出て以来，都市の博覧会へむけた活動として，トインビーホールに端を発する都市改良のためのさまざまな価値ある取り組みが現に行われていると述べても差し支えないだろう．セント・ロエ・ストレイキー氏が田園都市で行った住宅博覧会，および田園都市という賞賛すべき考え方そのものは，先に述べた都市の発展や宣伝活動を促進するものと言うことができるであろう．

われわれは，かつての偉大な都市における歴史的なドラマや，混乱した現在，過去と現在の幻燈劇と悲喜劇などを芸術的な (artistic) 表現で，すなわち万人にわかりやすいように提示すべきである．そして，未来に開かれた理念とは何かということをさらに理解し，〈真のユートピア (Eutopias)〉の到来を促進すべきなのだ——もっとも，到来に向けた奮闘はすでに始まっているのだが．

（高岡文章訳）

"Discussion," *Sociological Papers 1905* (1906): 112–119.

議論

議長　チャールズ・ブース卿 (The Rr. Hon. Charles Booth) の発言

私はゲデス教授のお話にいつも感激させられます．彼はわれわれのものの見方や考え方の幅を広げ，そして深めてくれます．そして，ゲデス教授の方法論の中に見られる，ある種の知見の助けを借りることで，われわれはよりしっかりと自らの考えを持つことができるようになるのです．われわれは皆，それぞれの社会的立場によって考え方を規定されているように思います．私は自分が物事を考える際に，罫線上に整然と並んだ単調な数字と統計に頼りすぎているのではないかと不安を感じるのです．私の知り合いに，すべてのものに対して定位置を与えたがる女性がいます．アメリカの発見は左端に，ローマ教皇は中央にといった具合に，彼女はあらゆるものを位置づけなければ気がすまないのです．これに対して，ゲデス教授ははるかに工夫に富んでおります．ゲデス教授が示された魅力的な図式——それらは彼自身が思考を形成する際に用いられる方法から生まれたものですが——に従うことは，興味深く，魅力的で，有用なことであります．最も重要なのは，時間と空間に関するより大きな概念を持つこと，そして，ゲデス教授がわれわれの関心を喚起したようなさまざまな考え方す

べてを包摂しうる幅広い概念を持つことである，というのは疑いのないところであります．何らかの方法によって，われわれはそうしたものを持たなければならないし，そうすることによって一つ一つの事柄がその価値を倍増させるのです．われわれは個々の事柄を概念枠組みの中に位置づけることができるのです．したがって，私は以下のことを希望いたします．すなわち，この議論において，それぞれが自分自身の方法や問題関心を発展させる一方，われわれすべてが共有でき，かつ，実生活の改善，特にロンドンにおける生活の改善に応用できるような，実践的な視点を提示できればと思います．トインビー・ホール(Toynbee Hall)のキャノン・バーネット氏の妻であるバーネット夫人により始められ，明らかにされてきた理論体系についてお話しましょう．その考えはハムステッドにおいて最近確保されたようなオープン・スペースに関係しています．すでにご存知のことと思いますが，イートン・カレッジの所有している土地が，ハムステッド・ヒースのオープン・スペースを拡張する——自然環境を保全するのが目的です——ために確保されています．さらなる提案としては，現在，広く確保されつつあるオープン・スペースの周囲の土地を獲得すること，そして「田園郊外(Garden Suburb)」と呼ばれるものを作り上げるためにこうした拡張を利用すること，が挙げられます．これはわれわれすべての頭の中に抱かれているであろう「田園都市(Garden City)」構想から派生したものであり，私にはそれが「田園都市」構想のまさに実践的な応用であるように思われます．われわれが先ほど聞いたお話と関連することですが，「田園都市」構想とは市民生活のよき要素を一つにまとめあげるのだという根底的理念に基づいているものです．それは特定の階級，特別の考えのためではなく，あらゆる階級，あらゆる考え——つまり，さまざまな要求を備え持つ，多くの人々のためのものでなければなりません．そして何にも増して，そうした大地や丘の美しさは，犠牲となるためにあるのではなく，郊外の善，ロンドンの善のために使われなければならない

のです．私はそこから，次につながっていくような実例が現れてくることを望みます．さて，以上の私の話が本日の議論に対して少しでも刺激を与えることができ，出席されたみなさんの関心を惹起することができたなら，それは私にとって心からの喜びとなるでしょう．

スウィニー氏 (Mr. Swinny) の発言

ゲデス教授は報告の終わり頃に，次のように述べました．アメリカの都市は，ギリシャやローマ，中世ヨーロッパから，それらの文明の非常に多くの部分を相続したと．こうした発想によって，われわれは，果たしてこの地理的な調査が一般的な歴史的調査に先行するものなのか，それとも後に続くものなのかどうかについて考えるようになると思っています．現在われわれが，もしイングランドの川の流域が，流域における町とともにイングランド国民の一部であると考え，またイングランド国民が西欧の一般的な歴史的進化とともにあると考えるならば，問いを次のように単純化しても許されるでしょう．すなわち，西欧全体に共通するような都市の歴史的発展とはどのようなものなのか．あるいは，イングランドの都市はどのような点が独特なのか．また，ある特定の都市の進化のどの部分が，流域における独特の位置によるものであるのか．したがって，まず始めに，イングランドと西欧の歴史的進化の一般的な理念を把握することが必要であると思われます．そうすることで，進化の過程において都市が果たした役割について，続けて考えることができるのです．都市は直接的な環境の結果から生じたものであるとともに，都市に影響を与える文明の発展もまた環境により影響を受けている，ということを考慮しなければならないのです．

J. L. テーラー博士 (Dr. J. L. Tayler) のコメント

ゲデス教授の話に言及しつつ，〔テーラー博士は〕働く職人と思考する職人についての，思考や行動の広く行き渡った傾向が，本質的に実践的な性質を持っているイングランドのような国において，もし思考する人と働く人との関係性についてのこうした考えが正しく理解されうるならば，高位の精神的な理念に対して軽蔑を感じているような多くの人々が，その見方を変えるであろうと述べた．もしビジネスマンやビジネスウーマンが，純粋科学の高位の領域においても，彼ら自身と同様の仕事や労働に従事する思考家が常にいるということを理解するに至ったならば，彼らは幅広い観念的な見通しが必要となる問題を扱う際に，自然とそうした思考家を信頼するようになるだろう．

さらに，高い精神的能力を持った学生たちが，働く職人にとって日々関係しているような物事を研究するという考えは，彼らの実践的な――そしてある意味では粗野な――目的を，深化させ，洗練させ，純化させるだろう．一方で，あらゆる科学的研究が，科学的側面と同時に産業的な側面を持つことを知ることによって，思考する職人は日常的な生存の要求に対してより敏感になるであろう．

もし，こうした考えがわれわれの共同体のすべての階級に行き渡ったならば，学ぶことへの疑念は学ぶことへの健全なる熱狂の感情へと必然的に変化し，その結果，真の近代国民的精神を生み出すようなわれわれの様々な日常的行為に対しても，一体性と方向性とが与えられるであろう．なぜなら，そうした思考と労働の技術に関する理論が，正すべきものとしてのまさにこのような精神と肉体の分離，思索と実践の分離，階級と個人的努力の分離こそが，洗練と非洗練，習得と非習得との間の目に見えない亀裂を生み出すことで，われわれの能力を破壊しているのである．低位から高位へ，直接的実務から究極的理想への前進的進化が必要なのである．

アヴェリン博士 (The Rev. Dr. Aveling) の発言

何が議論するにふさわしく，有益な議題であるかということに関して，講師〔ゲデス教授〕は一つの点を指摘されました．彼はわれわれは都市によって作られたのだと言いました．かなりの部分において，これは疑いもなく真実であります．しかし一方で，彼はわれわれ自身の努力によって引き起こすことのできる，環境の改良ということも主張しました．したがって，都市はわれわれによって形作られてもいるのです．それでは，個人が都市によって作られるのか，都市が市民によって作られるのか，この一見すると相矛盾する二つの考え方に与えられるべき正当な評価とは，一体どのようものでしょうか？　私には社会的進歩のこのような二つの要因の間に何か確固とした関係性を打ち立てること，もしくはその関わりを調整することが，哲学者にとっては面白く，経済学者にとっては有益であるように私には思われます．この問題は間違いなく難問ではありますが，しかしその解決は大いに価値のあることでしょう．私が申し上げた質問に対するいかなる解答も，私はあえて提示することはいたしません．私はただ問題を提示するだけにしたいと思います．

A. W. スティル氏 (Mr. A. W. Still) の発言

現在われわれが生きている時代は，都市が個人的利益の増進のみに夢中になるような種類の人間を作り出しているために，人々が社会的義務――それは人々自身にとって最も大切な意味を導くはずのものなのだが――を完全に失ってしまっているような時代です．われわれはゲデス教授がおっしゃったことから，いくつかの希望を見出すことができます．それは環境に働きかけるためにわれわれの特性を活用し，われわれを環境の奴隷としてしまうような条件から逃れ出るための努力をするときがやってきた，ということなのです．私はボーンビルの愛すべき小さな田園都市やその他の地域のいくつかの実験を非常によく知っております．しかしながら，都市

の公共的な拡張という点において，人々がスラムの一区域から外へ出て，新たな地域を作り出すと，そこがかつて飛び出してきた場所と同様に品位の低い，嫌悪感を引き起こすようなものへと変わっていくということを私は見てきました．都市の善き状態を維持しようと自発的に活動する人たち，ゲデス教授が先ほどいかにも魅力的な言葉でわれわれの前に提示したような，あらゆるすべての知識を獲得することをその仕事としているような人たち，都市生活における最善かつ最高位の理念を高めるという方向に共同体の精神を導くために，持っているすべての力をつぎ込もうとする人たち，このような人たちによって作られている委員会や団体によってなされるべき善き仕事の領域がまだあると私は常に思ってきました．こうした種類の結社から，私が先ほど述べたような動きが現れてくるということは決して不可能だとは思いません．私は長い年月にわたって都市の利益のために活動することが可能であり，大きな影響力を持ち，指導を求められ，そして公益のために多くの資金を管理・運営することができ，やがては受託財団(trust)へと発展するような，そうしたそれぞれの集団の可能性について考えているのです．もしわれわれが，大変知的で幅広い視野を持った何十人もの人たち――あらゆる市民生活の発展傾向の趨勢を見渡すことができるような，その進歩を支えるための判断をもたらすような，そして公衆を正しい方向へと向けさせることができるような――を獲得することができるならば，大いなる奉仕がなされることでしょう．少なくとも一年に一度，こうした小さな集団が全体協議会に一同に会し，意見交換や知的交流を通じて相互に助け合うことによって，彼らは国の利益となりうるような市民的理念を向上させ，完成させることでしょう．今現在，われわれの努力があまりに多く特殊化されてしまっていることに，われわれは苦しんでいるのだと思います．われわれの身の回りには，視覚障害者の保護施設にのみ献身する人や，聾唖の組織やそれに類似したものにのみ興味を抱いている人，あるいは慈善団体に専念する人などは存在しています．それ

らはすべて素晴らしい仕事ではありますが，しかしながら，彼らが公益のために必要となる幅広く包括的な視点を手にすることは困難なのです．貧困を減らし，身体的堕落を抑制するために，われわれが生活している環境の状態を向上させていくための継続的な努力がなされなければなりません．家庭と都市は，健康的で美しくあることが必要です．そして，そこに暮らす人々が自然との接触や社会的責任の観念を高め増大させるようなあらゆることを学ぶことによって，自身の視野を拡大させるよう動機づけられている必要があるのです．

E. S. ウェイマウス氏 (Mr. E. S. Weymouth) の発言

先ほど〔ゲデス教授により〕提示されたような方法で都市学を学んだ場合，そこからどのような実践的な成果を得られるのかは，簡単には答えられないことでしょうし，彼自身そのことを承知されていることと存じます．社会学を実践的に学びたいと思っているロンドン住民は，ゲデス教授が行ったように，ロンドンやその周辺の区域をとりわけテムズ川流域との関わりに注意しつつ，精密に観察しなければならないとお考えになっているのでしょうか？　都市を実践的，もしくは倫理的側面から見ることで，彼は次のように告白しているに違いありません．つまり，テムズ川流域の地理についてはそれなりの知識を獲得したにもかかわらず，それがロンドンにおける市民生活の改善のための実質的な助けとなっていると彼自身は感じていないと．ゲデス教授は，彼らがロンドンの不潔さや下品さと並んでまず始めにその富を学び，そして続いて，同様の現象が現れている他の大きい町を学ぶことを願っているのでしょうか？　そのような労働に見合う成果というものが果たしてあるのでしょうか？　彼自身，都市の状態の改善のための公的および私的なあらゆる努力が，生存のための激しい闘争に従事する大半の人々を置き去りにしたまま，かなりの程度ロンドンの地主の賃貸料の上昇という結果をもたらしてしまったことを観察しました．

そして，そのことにひどい落胆を感じた彼は，料金や税が本来重荷を負うべきでない人々に圧し掛かっている限りは，地方自治の問題に人々の関心を集めることが難しいということを自覚していました．そして，都市学の研究のためには，彼にとって公正な状態だと思われるような条件に基づいて，共同体的生活を築き上げるための努力がなされている都市をその対象とすることを好んだのです．1897年，彼は「デイリー・テレグラフ紙(Daily Telegraph)」のなかのある記事に感銘を受けました．それには「美しい土地，貧困のない社会，心配のない生活」という見出しがつけられていました．その記事はナタール(Natal)州のダーバン(Durban)についてのものでした．記者はこの町の繁栄が次のような事実によるものだと考えていました．すなわち，郊外がすべての（地価などの）自然増額(unearned increment)を浪費する私的所有者に引き渡される代わりに，共同体の手によって維持されているという事実に．たとえこの賛辞にはいくぶんかの誇張が含まれていることが明らかだとしても，それでも都市学を学ぶ学生はこの町の経済的条件は学ぶに値すると感じたことでしょう．同様にニュージーランドでは，1891年における地価に対する税の導入が町の繁栄をもたらし，ニュージーランドからの人口流出の波を流入の波に変えました．再びイングランドを見てみると，ボーンビルやポートサンライトのような，この国において現在行われている実験のなかでも最も興味深いものがあります．それらはみな，理念を持った人々によって築かれた田園都市であります．ゲデス教授は，都市学を学ぶ学生――自分の住んでいる都市に関するかなりの実用的な知識を持っており，また当然のように持っていると主張している――が，彼によって学生たちの前に設定されているように思われるとても手に負えないような作業に取り掛かっていくよりも，社会的実験の成功や失敗を学ぶことによってこそ，真の進歩を作り上げるのである，ということを感じざるをえませんでした．しかしながら，学生たちが，研究者たちが描いたような抽象的な都市学を離れ，具体的な

都市学の建築学的な，もしくは歴史的な側面へと向かうときには，ゲデス教授以上の素晴らしい指導者はいないでしょう．ゲデス教授のエディンバラにおける活動とダンファームリンの改良のための計画は，広く知られるようになってきております．

ロンドン労働組合評議会　トムキンス氏 (Mr. Tomkins) の発言

さまざまな団体 (public bodies) に所属し活動するすべての人々は，ゲデス教授の都市学に関する一連の講義に出席するべきでしょう．講義に出席することは，確実に社会的利益の増進の手段となるでしょうし，頻繁に公的な人間を惑わす例の自己利益というものを排除してくれることでしょう．しかしながら，今日の労働者にとってより大きな視野を手に入れることほど難しいことはありません．現在，労働者の行う仕事は，中世における職人たちのギルド (arts and crafts guilds) の時代のものとはあまりに違っています．今や労働者は産業の分業体制の中に位置づけられ，彼独自のやり方で仕事をこなすことは不可能になっています．労働者は部分的でささいな工程にのみ集中させられているため，狭い視野しか持てないのです．労働者は仕事中ずっと単純作業をし続けます．そのため，彼はあまりに疲弊してしまい，生活に対するより大きな視野を持つことなどできないのです．彼は時々，現在の作業場において浪費されているような能力や活力や実践的な美点の価値について考えます．この国やアメリカ合衆国の田園都市に言及しながら，トムキンス氏は次のように述べています．労働者を工場に縛り付けておくためだけではなく，社会のために資金を活用する偉大なる財団（トラスト）を実現するという考えは，未来に対する大いなる可能性を開示するものであります．しかし，どんな運動も成功させるためには，大いなる大衆としての労働者を教育し，彼らの間に真に健全で社会的な公共的意見を作り上げることが必要となるでありましょう．

ゲデス教授による回答

ゲデス教授は，議論への回答として，スウィニー氏の指摘した点には全面的に賛同するが，彼が講演の中で博物館 (civic museum) について述べたことに関して訂正を加えたいと語った．エディンバラのゲデス教授の博物館には，丘の要塞を持った古い町の地理的モデルなどを展示した大きな部屋がある．その部屋の壁には，歴史や地理をこと細かに記した地図や図表がつるされている．部屋の反対側には，都市の自治や独立を現すシンボルである十字塔 (the market-cross)〔町の中心・境界・市場などの標識に用いられたもの〕がある．その周りには，都市の他の側面を表現したものが一つにまとめられている．ここで，ゲデス教授はもう一つの点に関して答え，人々が決定論と自由意志に関する哲学的議論に決着をつけることはできないだろうと述べた．彼らは必ず，若いときには状況の新奇性 (the novel of circumstance) に対して傾倒し，後になって性質の新奇性 (the novel of character) に対して傾倒するが，彼らは常に一貫して生というものが，環境に干渉する個人の技能のゲームであると感じているのである．スウィニー氏のこうした図式は一面的な見方にすぎない．スウィニー氏は一方で場所がわれわれを作り，そして他方でわれわれが場所を作るという極端な対立図式を作りすぎた．人々はどのようにして目指すべき理想像を選択するのだろうか．人々は自分たちが周りの環境，良し悪しにかかわらず，あらゆる文化的遺産，過去の伝統といったものの影響下にあるということを知っている．しかしながら，人々は，彼ら自身にとって善く見える要素を選び取らねばならない．したがって，彼らは都市の風習を忌避するかもしれないのである．古いスコットランドの半ペニー硬貨の図柄を指差しながら，ゲデス教授は次のように述べた．半ペニーは世界の貨幣制度の真に威厳ある象徴であるとは言えない．しかしながら，半ペニーの片面には「アルテミス神を打て (Beat dues artem)」というモットーとともに働く職人の姿が刻まれており，もう片面には帝国の鷲や聖ジョンの子羊

とともに巨大な伝説が刻み付けられているのだと．

ゲデス教授の博物館の話に戻ると，彼が説明した部屋の下には，スコットランドのより大きな博物館があり，さらにその下には，イングランドやアイルランド，アメリカなど英語圏の世界全般——帝国だけではない——の博物館がある．そのすべては，西欧文明のより大きな進化を表現するような博物館や図書館の上に成り立っており，〔スコットランドやイングランド，アメリカなど個々の地域は〕過去の子供たちに過ぎないということを明らかにしている．ゲデス教授は博物館を高く評価する．なぜなら，そこではすべての都市がその過去や現在の姿を表すとともに，個々の都市は決して全ヨーロッパや全西洋から切り離しては考えられないことが明らかに示されているからである．

〔ゲデス教授に対して〕非常に大きな重要性を持つ二，三の実践的な質問が出されてきた．しかし，彼は，あらゆる点において，土地への課税という問題に立ち入ることなしに，実践的で実行可能なことを考えることができると述べる．それ〔土地への課税〕は政治的な態度に関する問題である．つまり，鉱山使用料に言及することなしに，石炭の質について検討するのが可能であるのと同じなのだ．また，ウェイマウス氏は古い建物を保存することに関して言及しているが，もう一度テムズ流域を下ってみれば，彼にとっても学ぶことが多いのではないだろうか．大きな都市と水運が密接に関連していることに気づくことは，非常に重要なことだったのである．テムズ川とディー川を下れば，彼らは，一方の川岸にはウェストミンスターの古い大寺院，他方の川岸にはスコーン (Scoon) の古い大寺院を見つけるだろう．イングランドとスコットランドの王はそこで王位に着いた．なぜなら，そこが最も重要な場所——大いに歴史的興味のある地点でもある——だからである．実際的な利益の問題としては，スコーンもウェストミンスターも同様に，その下に川を横切って橋が架かった時点で最高度の重要性は持たなくなったとゲデス教授は述べた．そして彼は次に，偉

大なるタイ (Tay) 橋が架かったときに，まさにパースは副次的な重要性しか持たなくなった，ということを指摘した．よって，それはロンドンにとってとてつもなく重要な問題となった．なぜなら，今度はロンドンがはるか遠くの下流で大きくて新しい橋がかけられることによって多大な影響を受けるからである．この川の流れをたどっていく研究は，歴史的であると同時に現実的かつ実際的な重要性を持つ．ゲデス教授は，かなりの間，アメリカ合衆国の大都市において活動してきており，そこでの素晴らしい努力の数々に感銘を受けてきた．そして，アメリカ合衆国の大きな都市ですばらしい努力が達成されたのは，タマニー協会を非難することによってではなく，理解することによってなのである．人々は，ケルトの部族長がその一族をいかにして支配しているかという仕組みを理解しなければならない．そして，そうした方法を他の方法によって置き換えるようにしなければならない．そうすることによって，その部族長を殺すよりも再教化することで十分であるということを発見するだろう．

ゲデス教授は市民的結合 (civic unions) の進化に対するスティル氏の見事な提案に感謝するということを述べて結びとした．彼はスティル氏のその発言の中に，いずれ発展していくであろう非常に重要な理念があると確信していた．

（青島耕平訳）